

京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA

2017年度年次報告書

Annual Report 2017-2018

@KCUA

KYOTO CITY UNIVERSITY OF ARTS ART GALLERY

Arin Rungjang: Mongkut

アリン・ルンジャー「モンクット」

Text by Ellie Nagata
Photos by Takeru Koroda (pp. 2-4, 6-9)

2017年10月、京都市立芸術大学ギャラリー@KCUAでは、タイの歴史を出発点とする作品で知られる現代美術家、アリン・ルンジャー (Arin Rungjang) の日本初の個展「モンクット」を開催した。「モンクット」はタイ語で「王冠」を意味し、ルンジャーの作品《モンクット》の中心人物の一人であるラーマ4世の別名でもある。複数の要素から成る本作品のうち、立体物を@KCUA 1に、映像を@KCUA 2に展示した。以下は2015年にエリン・グリーンソンにより執筆された英文を和訳し、本展の構成に合わせて若干編集したものである。

アリン・ルンジャーは、複数の時代と場所、言語を横断しながら大きな物語と小さな物語を交差させ、歴史上の事物を巧みに再検討することで知られています。ルンジャーはタイの歴史上の知られざる側面や、作品制作の現場とコンテキストの中でそれらが現在と交差するところに関心があり、時空間上ではかけ離れている事象を結びつけるモノに着目します。

《モンクット》ではルンジャーの疑問を軸に、タイで敬愛されてきた象徴的な存在である「王冠」が取り上げられています。彼はリサーチをする中で、ラーマ4世(1851-1868)とナポレオン3世(1852-1870)との統治期間が重なる時期のフランス・タイ外交関係を振り返ります。それは、東南アジアと称される地域で西欧諸国が植民地支配を強めた時期と重なっています。それまでの数世紀にわたり、シャム(タイの旧称)は当地域の中でもっとも豊かで強大な王国でした。ラーマ4世は、植民地化を回避するために友好的な外交政策や通商協定を採用し、帝国主義に駆られたフランスとイギリスの利害関心を巧みに調整していたことで知られています。シャムは当地域で公式の植民地支配をまぬがれた唯一の国家であり、その功績は誇りに思われるとともに議論も呼んでいます。

映像や彫刻などで構成される《モンクット》では、シャムの相対的主権にまつわる知られざる歴史に光をあてるためのコンテキストとして、現在が用いられています。西欧ではモンクット王(「モンクット」はタイ語で「王冠」を意味する)として知られるラーマ4世は、自らが受け継いだ王冠を二度にわたり複製しました。1861年6月27日、フォンテヌブロー宮殿にてシャムの大使により二つ目のレプリカがナポレオン3世に贈られました。

本作の一部を成す映像は、パリのギメ東洋美術館の東南アジア美術部門のチーフキュレーターであるピエール・パティストによる語りとともに、薄暗い冬の光に包まれた宮殿という美しいシーンから始まります。パティストがフランスとタイとの宮廷関係や外交で献納された品々や陳列における構成の正当性などさまざまな話題について触れるなか、一人の若い男が誰もいない宮殿をめぐる、ナポレオン3世の妻である皇后ウジェニーの応接間で、本来の場所に安置されているレプリカの王冠を見つけます。彼はガラス張りの陳列棚の前に立ち、手持ち式の小型3Dスキャナーをさりげなく使います。

映像の第2部は、モンクット王の子孫にあたる、コーン仮面舞踏劇の仮面や冠の職人、ウォーラック・スークサワット・ナ・アユタヤーによる語りで構成されています。スークサワットが家系や王冠の技法について語るなか、カメラは柔らかかでトロピカルな光にあふれた工房の隅々を映し出します。道具や素材に囲まれて、スークサワットと夫は、宮殿で若い男が得た3Dスキャンデータを参照します。データにより無限に複製することができるにも関わらず、彼女たちは手作業で行います。彼女たちの作業の目的をほのめかしつつ、映像は骨身を惜しまない工程を捉えることに終始します。スークサワットが仕上げた大作、すなわち1782年に作られた王冠を基にして1861年に複製したレプリカを2015年にさらに複製したレプリカは本展の展示室内でご覧いただけます。

《モンクット》のこの複雑な連鎖により、一般的に受け継がれてきた直線的な歴史は再考を迫られます。《モンクット》の象徴的な交渉力に対するルンジャーの繊細なアプローチは、タイが得た主権と過去と現在についての物語のある側面を明らかにします。現在の視点から見ると——それは信頼できる証を得られないほどの至近距離の眼差しだと彼は考えていますが——、王冠のこの最も新しいレプリカは「両極を映す鏡」となるでしょう。

エリン・グリーンソン(英文和訳:西尾 咲子)*1



《モンクット》は2015年3月にパリ郊外のメゾン・ダール・ベルナル・アントニオーズで、ジュ・ド・ポーム国立美術館のサテライト企画の中で発表された(3ページの文章は同展のパンフレットに掲載されている)のだが、実はフォンテーヌブロー宮殿の中国館が盗難に遭い、ナポレオン3世に贈られたレプリカの王冠を含む15点以上^{*2}の所蔵品が盗まれるという事件が、展示が開幕する半月ほど前に起きている。事件当時、ルンジャーは同じく3月に開幕した「PARASOPHIA: 京都国際現代芸術祭2015」のために京都に滞在していた。本件は今では2010年ストックホルムから始まった一連の中国古美術盗難事件の一環とされているが^{*3}、当時は《モンクット》の制作のために前年12月にフォンテーヌブロー宮殿で王冠の調査を行ったルンジャーらに突如注目が集まってしまう^{*4}、タイの政情不安のためルンジャーの帰国の際の安否が危ぶまれた。王冠、すなわち国王を題材とする時点で既にタイ国内では問題とされ得る作品であったが、その発表と同時期にレプリカの王冠が

全国各紙の一面を飾り、作品と盗難とが直接関係あると誤解される危険性が生じたのだ。ジュ・ド・ポーム国立美術館から盗難について遺憾の意を表す声明も出され^{*5}、幸い、ルンジャーが正式に容疑者とされることはなかった。結果的には作品に新たな歴史的背景が付加されたわけだが、ルンジャーが事件前に本作について目を輝かせて話す様子と、事件後の心から不安そうな様子との落差が記憶に残っている。

《モンクット》は同年5月からフランス・ボルドーのCAPC ボルドー現代美術館で同企画の巡回展として展示された後、@KCUAでの本展までの2年の間は公開されることがなかった。ルンジャーはこの機会に二つの新たな要素を作品に加えている。一つはフランスの挿絵入り新聞「ル・モンド・イリュストレ」1861年7月6日号の巻頭記事の挿絵で、下には「シヤム大使のナポレオン3世の厳粛な謁見 6月29日 フォンテーヌブロー宮殿にて(シャルル・イリアルト氏とムーラン氏のクロッキーをもとに)」と書かれている。こ

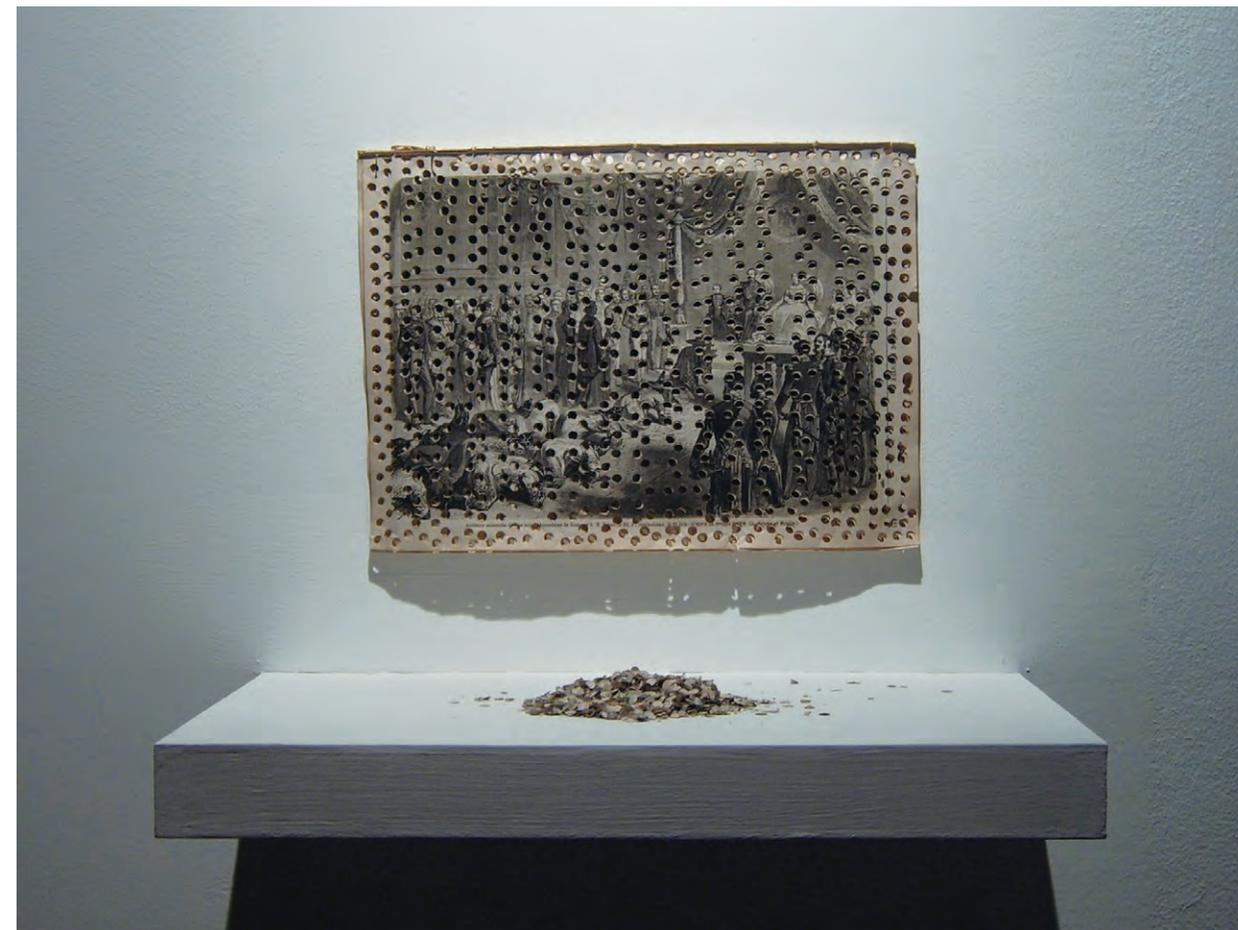
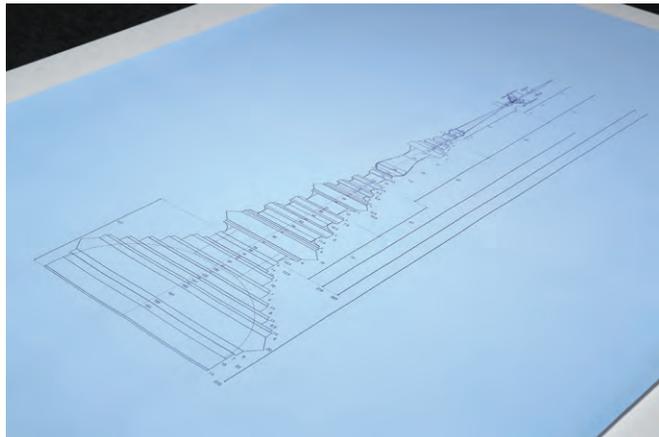


fig. 1 アリン・ルンジャー 《The reality is... I only did all this to get close to you》2010(部分) Gallery G23(バンコク)での展示風景 提供: アリン・ルンジャー
Arin Rungjang, *The reality is... I only did all this to get close to you*, 2010 (detail). Installation view at Gallery G23, Bangkok. Photo courtesy of the artist



新たに制作した王冠のレプリカの部品 2015 ビルマウルク、金糸、人工宝石ほか
Elements of the new replica crown, 2015. Burmese lacquer, gold thread, synthetic stones, etc.



王冠のレプリカの青写真 2015
Blueprint of the replica crown, 2015

の挿絵はルンジャーの2010年の作品《The reality is... I only did all this to get close to you》(fig. 1)の一部にも使われており、《モンクット》の題材となっている出来事には以前から関心があったことが伺える。2010年の作品はフランス人の元恋人が恋愛や家族について語る音声(フランス語・英語・タイ語の字幕付き)、絵画、ドローイング、そしてこの挿絵から成るインスタレーションであり、古今の出会いを融合させることによってルンジャーは文化や国の垣根を越えた関係性について思いを巡らせている。

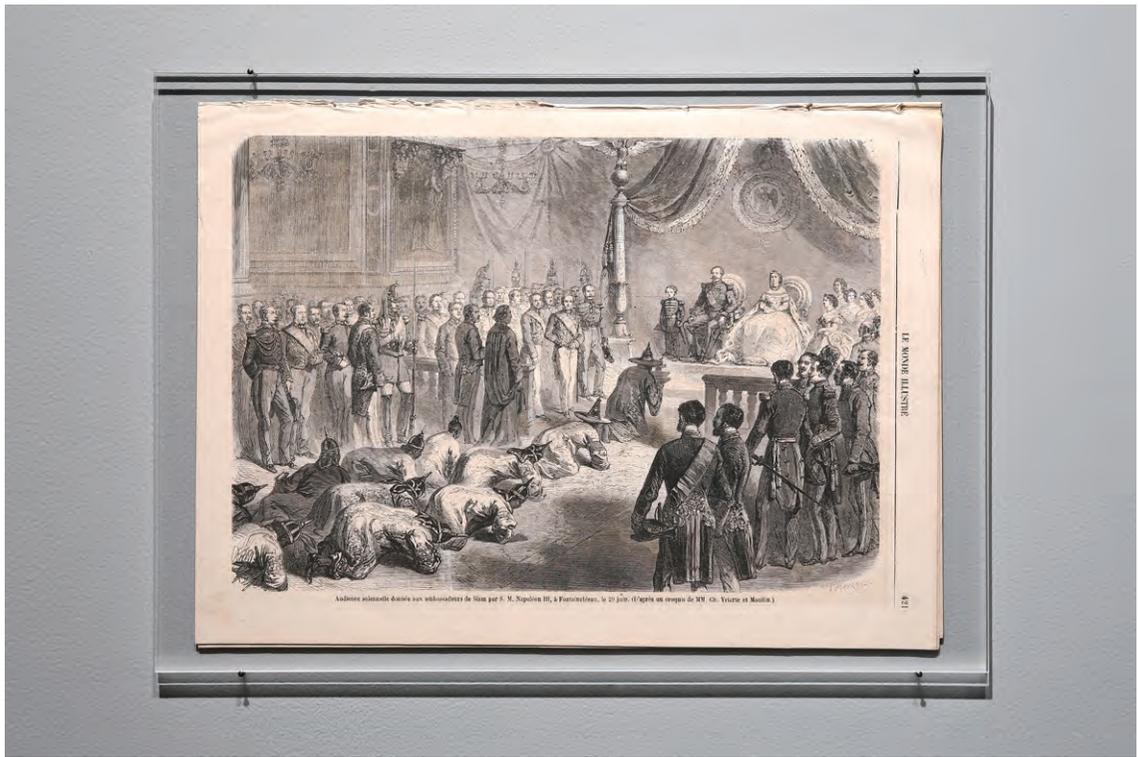
京都で追加されたもう一つの要素は、フランス人画家ジャン＝レオン・ジェロームが1864年に描いた、映像にも登場する幅260センチの大きな絵画作品《シャム王国大使のナポレオン3世の謁見 1861年6月27日》を本展に向けて新たに複製したレプリカだ。新聞の挿絵と同じ場面を描いており、絵画の前景には献納された王冠が配置されている。王冠がレプリカのレプリカで絵画もまたレプリカ、且つ元の絵画の制作年も実際の出来事の3年後となっており、混乱する来場者も少なくなかったようであった。更に言えばルンジャーがネットオークションで実物を入手した新聞はオリジナルが複数存在するマルチプルであり、データから印刷された青写真もルンジャーが望めばマルチプルになり得る。しかも本作品の王冠を制作したスークサワットには実はレプリカを3点作ってもらったそうなので、それぞれ手作りではあるが、レプリカの王冠のレプリカも厳密にはマルチプルと言えなくもない。そしてまた更に、ラーマ4世は1857年11月にイギリスのヴィクトリア女王に王冠の別のレプリカを贈っている*6ので、レプリカの王冠のレプリカの元となるレプリカの王冠もある意味ではマルチプルということになる。マルチプルのレプリカのレプリカもマルチプルで、モンクット王のモンクットが三つ、《モンクット》のモンクットも三つ。19世紀と21世紀が複雑に繋がっていく。

本展の後、《モンクット》は2018年1月からルンジャーの母校であるシラパコーン大学のアートセンターで展示された。本稿執筆時点は2019年3月のタイ総選挙や5月のラーマ10世の戴冠式を目前としており、タイは新しい時代を迎えようとしている。盗難事件をきっかけに当初想像された以上に物議を醸した本作を無事タイ国内でも展示できたことは、長く続いている政情不安がようやく落ち着いていく一つの前兆だと思いたい。



ウォーラック・スークサワット・ナ・アユタヤーが新たに制作した王冠のレプリカ 2015 ビルマウルク、金箔、金色のシルク、人工宝石ほか
New replica crown made by Woralak Sooksawasdi Na Ayutthaya, 2015. Burmese lacquer, gold leaf, gold silk, synthetic stones, etc.

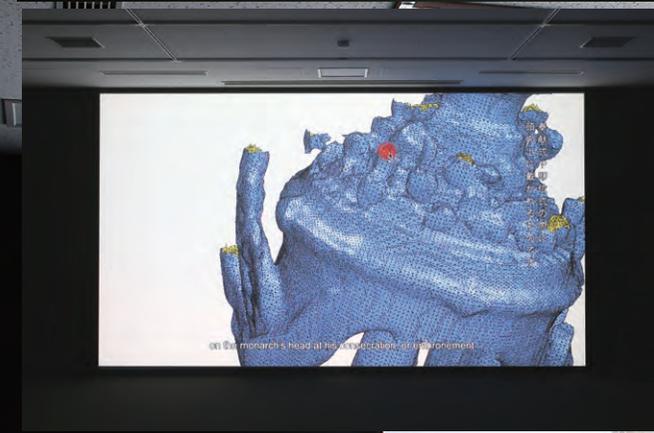
- 1 原文: Arin Rungjang: *Mongkut* exhibition pamphlet (Paris: Jeu de Paume, 2015), p. 3. <http://www.jeudepaume.org/index.php?page=article&idArt=2241>
- 2 2015年時点の各紙の記事では15点と報道されているが、2018年時点には22点という記述も見られる。
例: Alex W. Palmer, "The Great Chinese Art Heist," *GQ*, August 16, 2018. <https://www.gq.com/story/the-great-chinese-art-heist>
- 3 註2の記事などを参照。
- 4 作品の映像からのスチルが王冠の3Dスキャンを行う様子として掲載されている例もある。Kong Rithee, "Paris show features stolen crown," *Bangkok Post*, March 17, 2015. <https://www.bangkokpost.com/news/general/498497/paris-show-features-stolen-crown>
- 5 記事内の作家の発言より。Aria Danaparamita, "How the Theft of a Crown Suddenly Made a Thai Artist's Work Controversial," *Vice*, April 9, 2015. https://www.vice.com/en_us/article/qbvaqb/the-artist-at-the-centre-of-the-thailand-crown-affair
- 6 Royal Collection Trust, *Crown of the Major King of Siam* (facsimile), c. 1800-1857, RCIN 67205. <https://www.rct.uk/collection/search#/1/collection/67205>



絵入り新聞「ル・モンド・イリュストレ」1861年7月6日号 巻頭記事のための挿絵
 The July 6, 1861 issue of *Le Monde Illustré*, turned to the page with the illustration depicting the cover story. Caption: *Solemn reception of Siamese ambassadors by Napoleon III at Château Fontainebleau, June 29. (Based on croquis by Mr. Charles Yriarte and Mr. Moullin.)*



ジャン=レオン・ジェロームによる1864年の油彩画「シャム王国大使のナポレオン3世の謁見 1861年6月27日」の複製画 2017
 Replica of Jean-Léon Gérôme's 1864 oil painting, *Napoleon III and Empress Eugénie receiving the Siamese ambassadors on June 27, 1861*, 2017



映像 2015 HDビデオ、16:9、カラー、音声(フランス語・タイ語) +本展では和英字幕付き、28分48秒
 Video, 2015. HD video, 16:9, color, sound (French and Thai), with Japanese and English subtitles for this exhibition. 28 min. 48 sec.

断片集——タイ・フランス外交史

1656-88	ナーラーイ王の時代にフランス、イギリス、ヴァチカン市国を中心とした欧米の国々や、イラン、インド、中国などとの外交が大きく発展する。フランスとシャム(現タイ)との間を使節が何度も行き来し、他国の勢力がアユタヤ王朝においてかつてないほどの影響力を持つことになる。
1662	ローマ教皇アレクサンデル7世により、シャムは使徒座代理区となる。これをきっかけに、シャムとフランスとの交流が本格的に始動する。パリ外国宣教会が東アジア布教を目的として発足し、シャムを最初の布教先とする。シャムとフランスの公式の外交は、ランベール・ド・ラ・モット司教のアユタヤ到来により幕を開ける。
1664	イギリスとオランダの対インド貿易に対抗して、フランス東インド会社が設立される。
1680	シャム初の大使であるバヤー・ピバッゴサーは、ソレイユ・オリエント号に乗船しフランスに向かうが、アフリカ沿岸で沈没し死去する。フランス・タイ貿易は、フランス東インド会社によるシャムへの船の派遣とともに開始。
1684-86	1684年にクン・ピジャイワニ氏とクン・ビジマイトリー氏が率いる外交使節団が再びフランスに派遣され、タイへのフランス外交使節団の派遣を要望する。ヴェルサイユにてルイ14世に謁見。それにより、1685年にルイ14世はシュヴァリエ・ド・ショーモンが率いる使節団を派遣。シュヴァリエ・ド・ショーモンは1686年に次のシャム使節団とともにフランスに帰国する。
1687	フランスの外交使節団と軍がシャムに派遣される。兵士と宣教師、外交官、乗組員あわせて1361名が軍艦5隻で到来。フランス軍司令官デファルジュはルイ14世により「いかなる手段を使ってもメルギーとバンコクに拠点を築くよう交渉すべし」との使命を受ける。ナーラーイ王は、フランスの長官が指揮する要塞をこの2都市に建設することに同意。
1688	シャムにおける廷臣や仏教徒による外国人排斥運動が最高潮に達する。タイの官吏ベートルチャーがシャム革命を起こし、ロップリーの王宮を制圧しナーラーイ王を自宅監禁する。ナーラーイ王はこの年の7月11日に死去。ベートルチャーの戴冠式後、メルギーとバンコクのフランス軍は撤退し、フランスとの外交は19世紀までは途絶えることになる。
1760-65	フランス軍がビルマ軍エリート部隊を結成し、ビルマによるシャム侵攻を企てる。
1851	モンクットの名で知られる、チャクリー王朝の第4代国王となるラーマ4世の戴冠式が執り行われる。
1856	フランスがタイとの外交を再開。皇帝ナポレオン3世はシャルル・ド・モンティニイ率いる使節団をモンクット王のもとへ派遣する。貿易を促進し、信教の自由を保障する一方で、フランス海軍艦艇のバンコクへの入港を許可するという条約が締結される。
1859	皇帝ナポレオン3世の命により、フランスがサイゴンを占拠し、コーチシナに植民地を築く。
1861	モンクット王により派遣されたバヤー・シービバット(ペー・ブンナーク)率いるシャム使節団が、フランス海軍艦艇でフランスに渡る。皇帝ナポレオン3世と皇后ウジェニー、皇太子はフォンテーヌブロー宮殿に使節団を迎え入れる。王冠のレプリカをはじめ、豪華な贈り物を皇帝に授ける。
1867	フランスが正式にコーチシナ(ベトナム南部)を直轄植民地とする。カンボジア国王ノロドムは自国をフランス保護国とするように要望し、カンボジアに対する宗主権を放棄するようシャムに迫る。
1868	モンクット王が崩御。
1893	イギリスとフランスが植民地支配を拡げるなか領土をめぐる仏泰戦争(フランス=シャム戦争)が始まる。ラオスはフランス領となり、ビルマ北東部シャン州がイギリス領となる。
20世紀	フランスのシャム領有権拡大を防ぐべくイギリスが仲裁にでる。1909年の英シャム条約によりシャムは領土をイギリスに割譲する。20世紀初頭、政府内ではナショナリズムが高まり、これらの領土喪失は西欧列強に対して自らの主権を主張すべき必要があることのシンボルとして用いられる。
1940-41	ヴィシー政権下のフランスとタイとの間で、フランス領インドシナにあるタイがかつて保有していた地域をめぐる、タイ=フランス領インドシナ紛争が勃発。日本が後押しして停戦と講和条約に至り、フランスはカンボジア領土の大半をタイに割譲する。
1950	ラーマ9世が戴冠。
2016	ラーマ9世が崩御。
2017	10月26日にラーマ9世の葬儀が執り行われる。
2019	5月に新国王ラーマ10世の戴冠が予定されている。



映像からのステル
Video stills

上記年譜は2015年フランスでの展覧会のカatalogに収録されている英文を本展に際して和訳し、2016年以降の項目を追加したものである。出典：“Selected Tales: Franco-Siamese Relations,” in Arin Rungjang, *Mongkut* (Paris: Jeu de Paume; Paris: Fondation Nationale des Arts Graphiques et Plastiques; Bordeaux: CAPC-Musée d'art contemporain de Bordeaux, 2015), pp. 42-46. (英文和訳：西尾 咲子)



アリン・ルンジャン

1975年タイ・バンコク生まれ、同市を拠点にアジアと欧米を中心に活動。2000年にフランス政府の奨学金により国立高等美術大学(ENSBA/ボザール、パリ)交換留学(スタジオ・クリスチャン・ボルタンスキー在籍)。2002年シラバコン大学絵画・彫刻・版画学部版画学科卒業。2013年のヴェネツィア・ビエンナーレにタイ代表作家として《Golden Teardrop》(2013)を出品。2015年春には「PARASOPHIA: 京都国際現代芸術祭2015」参加作家として京都市美術館で《Golden Teardrop》と一部京都で撮影した新作《骨、本、光、虫》(2015)を展示。第18回シドニー・ビエンナーレ(オーストラリア、2012)を皮切りに多数の国際展に参加。2017年はドクメンタ14(ギリシャ・アテネ/ドイツ・カッセル)やジャカルタ・ビエンナーレ(インドネシア)への招聘を皮切りに、シンガポールやスイス・ジュネーブでの個展の開催、東京の大規模グループ展「サンシャワー: 東南アジアの現代美術展 1980年代から現在まで」への出品など、世界の第一線で活躍している。

Arin Rungjang

Arin Rungjang (born 1975, Bangkok; lives and works in Bangkok) is known for deftly revisiting historical material, overlapping major and minor narratives across multiple times, places, and languages. His interest lies in lesser-known aspects of Thai history and their intersection with the present in the sites and contexts of his practice. Objects, which can draw together distant events across time and space, are central to his investigations. He has a practice that spans different media and often involves video and site-specific installation. In his exploration of history and everyday life experiences he deftly dissects material and revisits master-narratives through the agency of the small event. His other exhibitions around the time of *Mongkut* at @KCUA include Jakarta Biennale 2017 and documenta 14 (Kassel, Germany and Athens, Greece, 2017).

アリン・ルンジャン「モンクット」

会期	2017年10月28日(土) -11月26日(日)
企画	京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA
主催	京都市立芸術大学
助成	公益財団法人 朝日新聞文化財団
協力	Gallery Ver, DC Collection、 東アジア文化都市2017京都実行委員会(東アジア文化都市2017京都 アジア回廊 現代美術 特別連携事業)、Future Perfect
王冠制作	ウォーラック・スークサワット・ナ・アユタヤー
広報物デザイン	尾中俊介(Calamari Inc.)
映像字幕	日本映像翻訳アカデミー株式会社
展示設営	池田 精堂、安藤 隆一郎、入澤 聖明、川田 知志、熊野 陽平、壺 恒太郎、西尾 咲子
展示風景写真・部分写真	来田 猛
謝辞	エリン・グリーソン、河本 信治、東嶋 隆伸、国際交流基金アジアセンター

Arin Rungjang: Mongkut

Saturday, October 28 – Sunday, November 26, 2017

Curated by Kyoto City University of Arts Art Gallery @KCUA

Organized by Kyoto City University of Arts with funding from the Asahi Shimbun Foundation, and with the cooperation of the Culture City of East Asia

2017 Executive Committee, DC Collection, Future Perfect, and Gallery Ver

Crown made by Woralak Sooksawasdi Na Ayutthaya

Flyers and signage designed by Shunsuke Onaka (Calamari Inc.)

Video subtitles by Japan Visualmedia Translation Academy

Exhibition installed by Seido Ikeda, Ryuichiro Ando, Masaaki Irisawa, Satoshi Kawata, Yohei Kumano, Sakiko Nishio, and Kotaro Tategami

Installation views and detail photos by Takeru Koroda

Thanks to Erin Gleeson, Shinji Kohmoto, Takanobu Tojima, and the Japan Foundation Asia Center

40ページに関連情報あり
Related information on p. 40

京都市立芸術大学芸術資料館では、学生の卒業作品や京都府画学校時代から収集された美術工芸に関する参考品など、本学の教育活動を背景とした資料を収集している。@KCUAでは、開設以来毎年「京都市立芸術大学芸術資料館収蔵品展」として、主に美術教育の観点からこれらの収蔵品を紹介してきた。大学から離れた場所にある@KCUAで本学芸術資料館収蔵品を展示することの意義を改めて検討するため、2017年度より「資料の活用方法」という視点で企画を考案することにした。

2 特集

移動する物質——ニューギニア民族資料

Text by Mizuho Fujita
Photos by Takuya Matsumi (pp. 12, 16-17)

そこでまず、収蔵品の「物質」としての「移動」に注目した。この「移動」というテーマは2023年に予定された京都駅東側エリアへの本学の移転に向けて@KCUAが手がけてきた「still moving」などの移転整備プロジェクトにつながるものでもある。参考品として分類された収蔵品のうち、特殊なコレクションの一つ「ニューギニア民族資料」は、ニューギニアの地から離れて「資料」という名の物質として保管された収蔵品である。また、ひとたび東山区今熊野にあった本学の旧校舎に収蔵された後に、現校舎である西京区大枝沓掛町へと移動している。そして近い将来には、大学にあるさまざまな物質とともに再び移動することになる……。こういったさまざまな「移動」が物質に何をもたらすのかを考えるための実験が始まった。



展示計画

Plannning
the Exhibition

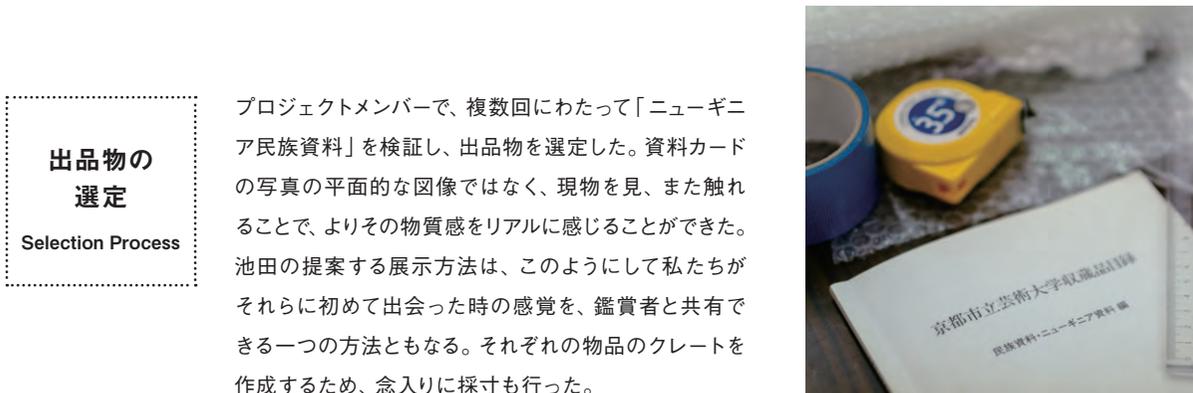
京都市立芸術大学芸術資料館「ニューギニア民族資料」は、昭和44年(1969年)に美術調査隊によって収集されたニューギニア島北東部のセピック川流域の神像や仮面、土器を中心としたコレクションである。現在では収集困難とされる。

文化そのものを収集することはできない。しかし、その中にある物質をコレクションに加えることは可能だ。

本学芸術資料館だけでなく、世界各地の美術館・博物館の収蔵品の多くは、さまざまな場所からの移動を経て保管されているものである。プロジェクトメンバーは、こういった移動によって切り離されてしまった、かつてそれらがあった場所に満ちていた非物質的なものを、展示された物質と再び融合させるための手段について協議を重ねた。そして、ニューギニア地域を研究の対象とする文化人類学者の行木敬(神戸山手大学現代社会学部准教授)、かつてニューギニアをフィールドに調査研究を行っていた民族音楽学者の山田陽一(本学音楽学部教授)の協力を得て、写真、地域に伝わる民話や音など、非物質的であるが移動可能な資料を収蔵品とともに展示することになった。

また、本展の会場構成を担った池田精堂より、運搬用のクレートに収めたまま展示をすること、引き出しを開けるなど、鑑賞者がそれを見ようとする行動を起こして展示されたものを見るという仕掛けや、セピック川流域から収集されたということ、また展覧会が梅雨の時期に開催されることに着想を得た、2階から1階にかけて川の流れや雨音を彷彿とさせる水音を流すための「水路」の設置が提案された。





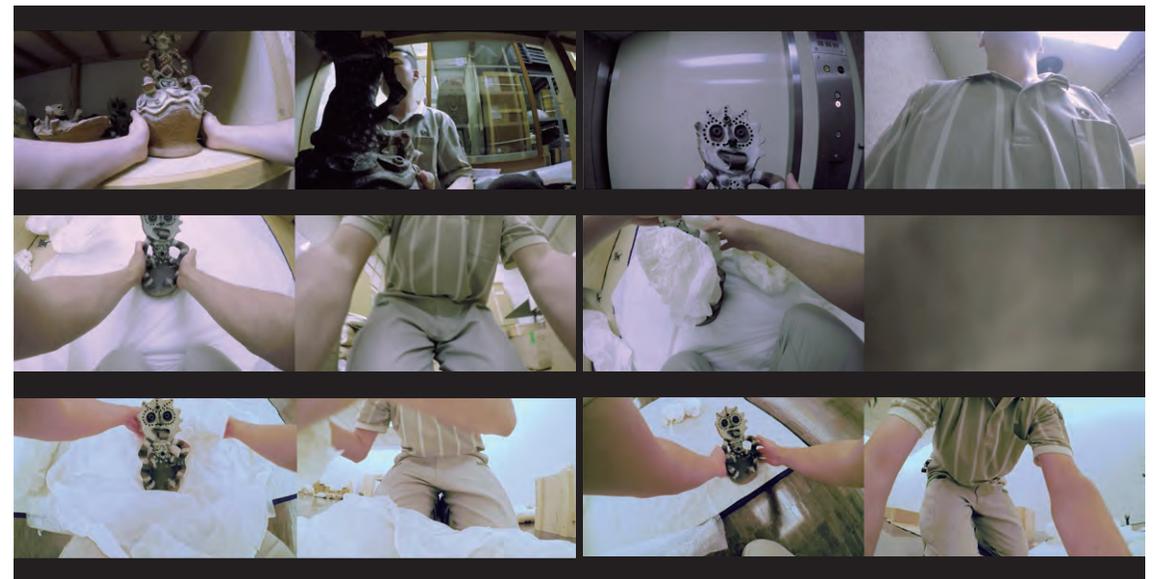
**出品物の
選定**
Selection Process

プロジェクトメンバーで、複数回にわたって「ニューギニア民族資料」を検証し、出品物を選定した。資料カードの写真の平面的な図像ではなく、現物を見、また触れることで、よりその物質感をリアルに感じることができた。池田の提案する展示方法は、このようにして私たちがそれらに初めて出会った時の感覚を、鑑賞者と共有できる一つの方法ともなる。それぞれの物品のクレートを作成するため、念入りに採寸も行った。



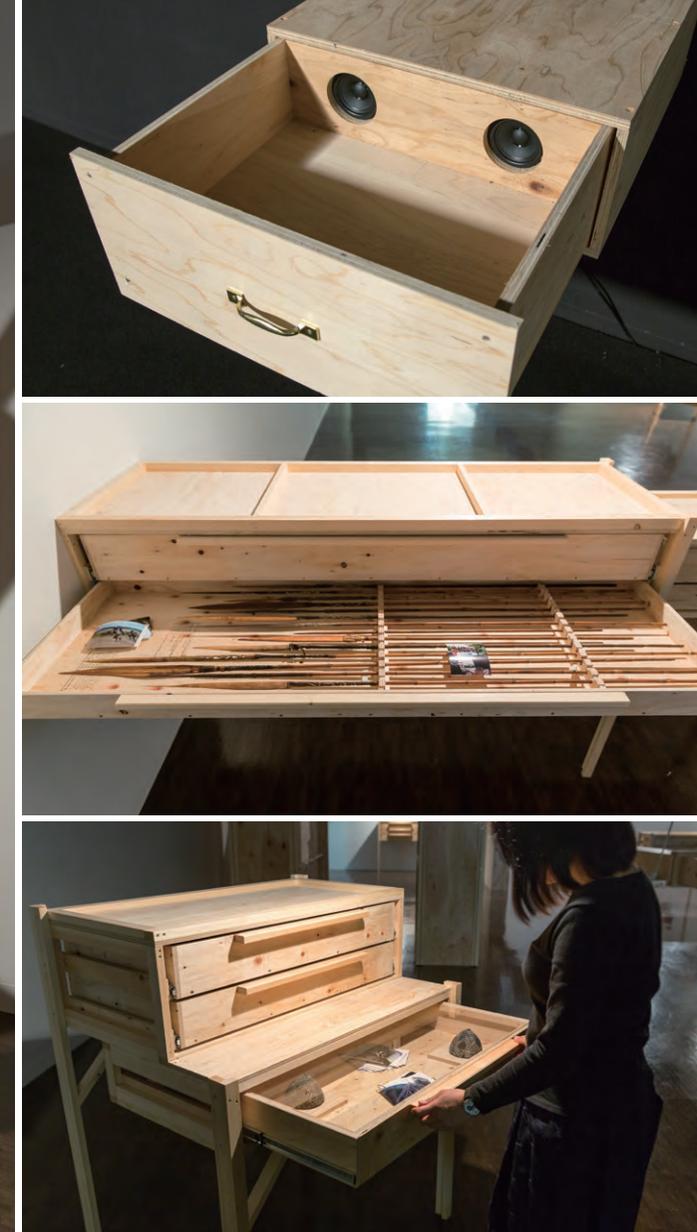
運搬
Transportation

収蔵品の「物質」としての「移動」を表すべく、梱包から運搬、展示までの一連の流れを、二視点（収蔵品および設営作業員）からの映像として記録した。たたき台となるシナリオを作成し、松見拓也によって撮影・編集が行われた。収蔵品の中に満ちている音に例えられた「マリアンム」（割れ目太鼓の二重奏）が、初めは大きな音量で、主人公の収蔵品が梱包材に包まれるに従って次第に音がぐもっていき、クレートに収められた時点で聞こえなくなる。そして梱包が解かれたとき、音は再び軽快に踊り出す。



映像撮影・編集：松見拓也
音楽：「マリアンム」（割れ目太鼓の二重奏）イアトモイの人びと
山田陽一（録音／解説／写真）『地球の音楽 42 バブアニューギニア 鳥のうた——セビック川流域の村から（CD付）』（日本ビクター／ビクター音楽産業、1992）より
協力：ヤマトロジスティクス株式会社
© 京都市立芸術大学
Filmed and edited by Takuya Matsumi
Music: "Malianmu" (slit drum duet) performed by the latmoi
From *Fieldworkers' Sound Collections 42 Papua New Guinea: Bird Songs - From Villages in the Sepik River Basin* (Tokyo: Victor Company of Japan/Victor Entertainment, 1992). Audio recordings, annotations, and photography by Yoichi Yamada. CD included
Filmed with the cooperation of Yamato Logistics Co., Ltd.
© Kyoto City University of Arts

vimeo.com/akcua/2017-new-guinea



展覧会

Exhibition

展覧会では、会場内に一切キャプション等を配置せず、配布資料に掲載する情報も最小限として、これらの物品がニューギニアで収集され、日本へと運ばれて収蔵品となり、館外貸出品として運搬されて@KCUAまで辿り着くという、美術館・博物館によって保管されるようになった「物質」の「移動」を示した。資料としての説明の代わりに、行木によって収集された現地の民話、人々の会話や写真を資料カードに見立てて随所に配置した。また、2階では収蔵品を全く陳列せず、開けると音の鳴る仕掛けのなされた引き出しに、山田によって収録された現地の音楽を「展示」した。

展示物を美的鑑賞の対象とするのでも、文化人類学的な調査に基づく資料陳列とするのでもなく、収集され、遠く離れた地に移動させられることによって切断された、かつて物質が纏っていた文化的な文脈、背景を非言語的に仄めかすのみに留めるといふものの見せ方については、民族資料展示のセオリーからはおよそかけ離れたものであろう。昭和44年にニューギニアへ出かけた教員・学生のグループは、正確には当時「未開美術調査隊」と呼ばれていた。近代西洋的なオリエンタリズムという輸入された概念に基づき収集されたこれらの収蔵品は、美術教育資料として京都の地にやってきた。世界中にあふれている、それぞれの経緯によって移動した物質たちは、ある意味でこれまでの人間の歴史をさまざまに象徴していると言える。「資料の活用方法」を探るということは、そのように残された物質たちと、現在に生きる者としてどのように付き合っていくのかをシンプルに考えるための一つの方法なのである。

京都市立芸術大学芸術資料館収蔵品展 / 状況のアーキテクチャー 2017 プロジェクト1「物質+感覚民族誌」パイロットプログラム
移動する物質——ニューギニア民族資料

会期	2017年6月10日(土) - 7月2日(日)
企画	京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA
主催	京都市立芸術大学
会場構成	池田 精堂 (京都市立芸術大学美術学部非常勤講師)
企画協力	佐藤 知久 (文化人類学者 / 京都市立芸術大学芸術資源研究センター専任研究員 / 准教授)
助成	平成29年度文化庁「大学を活用した文化芸術推進事業」
協力	行木 敬 (文化人類学者 / 神戸山手大学現代社会学部准教授)、山田 陽一 (民族音楽学者 / 京都市立芸術大学音楽学部教授)

28ページに関連情報あり
Related information on p. 28

From the KCUA Art Museum Collection / KCUA Situation Design 2017: Project 1 Pilot Program
Transferring Matter: Artifacts from New Guinea

Saturday, June 10 - Sunday, July 2, 2017
Kyoto City University of Arts Art Gallery @KCUA
Curated by Kyoto City University of Arts Art Gallery @KCUA with the cooperation of Tomohisa Sato (Researcher, Kyoto City University of Arts Archival Research Center; Associate Professor of Cultural Anthropology, Kyoto City University of Arts)
Exhibition design by Seido Ikeda (Part-time Lecturer of Sculpture, Kyoto City University of Arts)
Organized by Kyoto City University of Arts with funding from the Agency for Cultural Affairs, and with the cooperation of Kei Nameki (Cultural anthropologist; Associate Professor of General Social Studies, Kobe Yamate University) and Yoichi Yamada (Professor of Ethnomusicology and Acoustic Anthropology, Kyoto City University of Arts)

目次

特集 1 アリン・ルンジャー「モンクット」	02
特集 2 移動する物質——ニューギニア民族資料	12
@KCUA について	20
2017年度 事業総括	22
展覧会	25
イベント他	49
刊行物	54
平面図	56
運営委員会	58

CONTENTS

02	Special Feature 1 Arin Rungjang: Mongkut
12	Special Feature 2 Transferring Matter: Artifacts from New Guinea
20	About @KCUA
22	2017-2018 Overview
25	Exhibitions
49	Events, etc.
54	Publications
56	Floor Plan
58	Steering Committee

京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA について

京都市立芸術大学では、京都市西京区の学内施設として1991年より芸術資料館を開館し、陳列室で所蔵品の展示を行うほか、大小二つの学内ギャラリー、大学会館など展示に使用できるスペースを持ち、また時にアトリエ棟や新研究なども活用しながら展示活動を継続しています。これらは作品鑑賞の機会を提供し、また学生たちの日頃の活動成果を公開する実験的発表の場としても機能しています。2010年春、京都堀川音楽高等学校の新築移転に伴って、その敷地内南側にギャラリー棟（堀川御池ギャラリー）ができ、そこに京都市立銅駝美術工芸高等学校と共に、京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA（アクア）が2010年4月2日からオープンしました。

「@KCUA」は大学の英語表記「Kyoto City University of Arts」の頭文字に場所を示す「@」を加えたもので、音読みするとラテン語の「アクア=水」となります。生命を養う水のように、芸術が人々の暮らしに浸透し、創造力豊かな社会に貢献するという本学の理想を表現しています。アクア・プロジェクトとは「京都市立芸術大学の三つの機関、美術学部・音楽学部・日本伝統音楽研究センターが連携して、ユニークな芸術研究・教育の一端を地域社会に開いていく試み」として開始されたもので、当ギャラリーにも同様の意図が込められています。@KCUAに期待される役割には、以下の三つがあります。

①教育・研究成果を広く市民へ公開すること

創立以来130年にわたって本学では、様々な成果を生み蓄積し、大学の内外で公表しています。京都市の中心部に発表の場ができたことによって、より身近な場で市民に公開できる機会が得られることになりました。ここでは在校生、教員および卒業生の研究成果に基づく展覧会、ワークショップ、講演・講座等を市民向けに開催すると共に、京都を中心とする産業界や教育機関、研究機関との連携プロジェクトの成果を発表することが期待されます。

②芸術文化創出の人材交流の場とすること

ギャラリーにおける展覧会、ワークショップ、講座等の企画に際し、成果の公表そのものを目的とするだけでなく、学内、同窓会、市民、産業界、教育関係諸機関、研究所などとの連携プロジェクトを通じて、広く人々が交流できる場を形成します。

③芸術資源の連携活用のサテライト機能を果たすこと

本学と市民、京都市、産業界、他の諸機関が連携するにしても、基盤となるのは、情報の収集と交換です。京都が有する芸術資源としての人、物、場所、風景や景観、技術、材料、暮らしの知恵に関わる情報を収集し、蓄積し、交流させる機関が必要となります。本ギャラリーは、衛星的な位置を利用して、情報の収集、蓄積、交換（発信と受信）の一翼を担います。

京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA 外観



京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA 展示室(上:@KCUA 1/下:@KCUA 2)

写真 | 来田 猛 Photos by Takeru Koroda

2017年度 事業総括

まだ見ぬものに向かって

藤田 瑞穂(京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA 学芸員)

2014年の年初に発表され、そこから徐々に進んできた京都市立芸術大学の崇仁地域(JR京都駅東エリア)へのキャンパス移転計画をめぐって、この2017年度に大きな動きがあった。まず春に「京都市立芸術大学移転整備基本計画」が策定され、続いてこの計画をもとに、大学と都市の関係に大きな変化をもたらすキャンパス空間の設計について、京都市による公募型のプロポーザルが行われた。プロポーザル募集要項の参考資料には、この基本計画のほか、大学による移転基本コンセプトも含まれている。それは、大学のキャンパス移転に関する基本姿勢として、「芸術であること」「大学であること」「地域にあること」の三つを本学が果たすべき役割であるとし、新しいキャンパスを《Terrace》と位置づけるというものである。

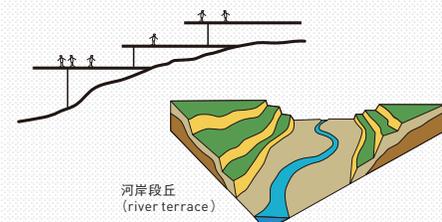
- ①《Terrace》とは、内から外に張り出して、人々を誘い、人と人・人と自然の新たな出会いや交流を導く「床」であり、広がりである。
- ②《Terrace》とは、本来の地面から少し浮いて、日常の視点を変え、新たな展望を広げる共有空間である。

要するに《Terrace》は、ある基準面から浮き隔たることによって新たな開放を生み出す、すなわち「隔たり」と「開かれ」の二つの働きを同時に実現する。

terrace【英】、terrasse【仏】

古フランス語では「盛り土」を意味する。語源はラテン語のterra(土、大地、地球)

- ・建築におけるテラス:建物本体からの突き出し部分、屋根の上の面
- ・地形におけるテラス:高低差のある平坦な面。段丘、棚田など



このプロポーザルでは大学のキャンパスは人間と環境との深い関わりを通して、時間をかけて熟成していくべきものであるとの見解から、大学・地域等の関係主体との対話を重ねて設計に取り組んでいくことが重視されている。最終選考に残った6組の提案はいずれも魅力的なもので、いかにこのプロポーザルが建築業界において注目されていたかを物語っていた。

受託候補者として選定された乾・RING・フジワラボ・o+h・吉村JV(JV=共同企業体、複数の異なる企業等が共同で事業を行う組織)のプランは、「まちのように育まれる、水平につながっていくキャンパス——大学と地域、芸術と社会の新しい関係性を生み出すフレーム」をテーマとしたものであった。新キャンパスでは、先に挙げた本学の果たすべき三つの役割が、「ひとつのまちが生まれ成長するように大学をつくる」「つくる」「つかう」「このす」が融合したプロセス「地域の生活空間とともにある有機的なキャンパス」の三つのフレームによって具現化されるという提案である。読み進めているうちに、このプランでは@KCUAが移転整備計画において非常に重要なものと捉えられていることに気づき、驚いた。賑わい創出軸とエリアマネジメント軸の十字路として塩小路沿いに@KCUAを配置し、京都駅から東山を行き交う国内外の来訪者と出会う場とすることが提言されていたり、設計チーム・大学・地域が「ともにつくるプロセス」を実現するための手法の一つとして@KCUAとの連携が明記されるなど、たびたびその名が登場するのである。確かに移転整備プレ事業を継続して手がけてはいる。フットワークも軽い。しかし、現在の@KCUAはサテライト施設であり、大学のキャンパスにおいて重要な役割を担うものであるとは私自身考えてこなかった。この提案そのままに計画が進むことはないにしても、襟を正す思いであった。

この一連の流れの中で、徐々に移転後の役割を意識したものにするべく、2017年度の@KCUAの事業ではいくつもの小さな変革を加えていった。

例えば開設以来続く、京都市立芸術大学出身の若手作家の活動を中心に紹介することを主眼としたプログラム「京芸 Transmit Program」のあり方

を見直し、本学卒業・大学院修了から3年以内で、@KCUAが一番推したいと思う作家を選出するという新たなシリーズとした。このようにした最も大きな理由は、@KCUAに来場する本学学生が極端に少ないことである。数だけで言えばむしろ他大学の学生の方が多いくらいの状況だ。そこで、前期展や年度末の作品展を中心に学生の動向を追い、距離をこちらから詰めていくことを考えた。功を奏しているかどうかはまだよくわからないのだが、2月の作品展からの広報開始、@KCUAでの展示を経て、美術関係者へのポートフォリオレビュー・展評の依頼、カタログの発行や「ART OSAKA」への出品など、出展作家へのサポートを含めた事業として継続していく。

また、芸術資料館収蔵品展を、12-17ページの特集でも述べた通り、美術教育の観点から収蔵品を紹介するという従来の企画から「資料の活用方法」という視点で組み立てる企画へと変えることとした。それは、移転後のキャンパスにおける、@KCUA、附属図書館・芸術資料館、芸術資源研究センターなどの各機関の創造的な循環、また外部との連携をも想定した先行実験でもある。この「移動する物質——ニューギニア民族資料」に端を発し、2018年度事業「im/pulse: 脈動する映像」のリサーチプログラムとして、年間を通じて文化人類学者との協働を試みた。さらにこの延長線上にある「拡張された領域における映像実験プロジェクト」が2018年度国立民族学博物館共同研究(若手)に採択されることとなった。

最後に、移転整備プレ事業「still moving」について触れておきたい。過去2回の「still moving」はいずれも展覧会として実施したが、そもそも、移転に向けての動きは展覧会のように始まりと終わりが明確なものではない。そこで、動き続けるものを表すにはどのような方法があるかを考えるために、2017年度の「still moving 2017: 距離へのパス——far away/so close」は、展覧会ではなく、日々の取り組みをイベント形式で公開する期間と位置づけた(それでもおそらく「何もない」展覧会に見えていたのではないかと思うが)。結果的に、年度末に仕上がった報告書を読んで初めて全貌が理解できた、と関係者に評されるくらいの謎めいたプロジェ

クトになったのだが、個人的には少しだけ前進したような気がしている。なぜならこれは、先に紹介した本学の移転に関する基本姿勢「芸術であること」「大学であること」「地域にあること」を意識した上で、それを何らかの形にしようとする試みであったからだ。日常的な価値観の外側に軸足を置き、オルタナティブな価値観を提示すること。一般社会ではリスクがあると思われることでも、それが新しいモノの見方や世界へのビジョンにつながるものであれば、失敗を恐れずに取り組めるのが大学であること。地域の新しい住民として、その歴史を引き継ぎながら、新しい歴史と創造的な地域社会を共につくっていくこと。これら三つの役割を果たそうとすることは決して容易ではない。しかし@KCUAの活動が、そのトリガーになる可能性ならあるかもしれない。サテライトという身軽である意味自立した立場をうまく利用して、新しい大学に向けての「たねまき」を地道に続けていくことには、きっと意味があるに違いない。

では、移転後にサテライトでなくなった@KCUAはどうなるのだろうか。そんなことを建築設計JVチームのメンバーに尋ねたところ、このような答えが返ってきた。メンバーのうち数名が所属している横浜国立大学大学院/建築都市スタジオ「Y-GSA」は開設当初、大学キャンパスではなく街の中に拠点を構えていた。より良い場所を求めて市と交渉を続けたが、結局キャンパスに戻ることとなった。しかし、最初に別の場所にあったものは、同じキャンパスにあったところで、やはり異質なままである。おそらく@KCUAも同じであろう。だからその点は心配しなくて良いのではないかと。それを聞いて私は二度喜んだ。ひとつは、とにかく今やるべきだと思うことをやれば良いという確信を得たこと。もうひとつは、この建築設計JVチームに@KCUAと共通する部分があったということに対してだ。これから私たちは、一緒にさまざまな種をまき、大学と地域の未来を共に考えていけるのではないだろうか。そんな期待に胸を膨らませたのである。

展覧会
Exhibitions

凡例

- ・肩書きは2017年度当時
- ・Names are listed in Japanese alphabetical order (some exceptions may apply).
- ・Romanizations of Japanese names may be unconfirmed.
- ・Titles and positions are listed as of the date of the exhibition or event unless otherwise noted.
- ・All exhibitions and events were held at Kyoto City University of Arts Art Gallery @KCUA unless otherwise noted.



京都市立芸術大学
ギャラリー
@KCUA1

写真 | 来田 猛 Photos by Takeru Koroda

2017.4.8 Sat - 5.21 Sun

京芸 transmit program 2017

- 展示室 | @KCUA 1, 廊下, @KCUA 2
- 開催日数 | 38日間
- 入場者数 | 3,425人
- 企画 | 京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA
- 主催 | 京都市立芸術大学
- 印刷物 | A4判フライヤー デザイン: 仲村 健太郎
B5判カタログ(54ページ参照)
たねまきアクア04(54ページ参照)

- 出展作家 | ARTISTS
- 水谷 昌人
Masato Mizutani
 - 迎 英里子
Eriko Mukai
 - 西 太志
Taishi Nishi
 - 矢野 洋輔
Yosuke Yano

Curated by Kyoto City University of Arts Art Gallery @KCUA.
Organized by Kyoto City University of Arts

Printed matter
A4-sized flyer designed by Kentaro Nakamura
B5-sized catalogue (see p. 54)
Tanemaki Akua 04 (see p. 54)

- 関連イベント
- 4月8日(土)
○ギャラリートーク
○オープニングレセプション
 - 4月8日(土)、15日(土)、22日(土)、29日(土)、
5月6日(土)、13日(土)、21日(日)
○迎 英里子 パフォーマンス「アプローチ6.0」



西 太志 Taishi Nishi



水谷 昌人 Masato Mizutani

開館当初から継続してきた企画「京芸 Transmit Program」を2017年度からリニューアルし、京都市立芸術大学を卒業、あるいは大学院を修了してから3年以内の若手作家の中から、いま、@KCUAが一番注目するアーティストを紹介するプロジェクトとした。アーティストの活動場所として日本でも1、2を争う京都における、期待の新星を紹介するシリーズとして、毎年4月-5月に開催する予定である。展覧会の実施にとどまらない活動支援も本企画の狙いとなっている。選出作家の今後の活動に役立てられるよう、ボリュームのあるカタログを作成。また、国内の若手・中堅の現代美術を専門とするキュレーターにカタログへの寄稿を依頼し、展覧会を鑑賞してもらうとともに、作家との対話の機会を創出する。そのほか、SNSや機関誌「たねまきアクア」などで以後の活動を紹介していく。

第1弾となる2017年度は西太志(2015年京都市立芸術大学大学院美術研究科修士課程絵画専攻油画修了)、水谷昌人(2016年京都市立芸術大学大学院美術研究科修士課程絵画専攻油画修了)、迎英里子(2015年京都市立芸術大学大学院美術研究科修士課程彫刻専攻修了)、矢野洋輔(2016年京都市立芸術大学大学院美術研究科修士課程工芸専攻漆工修了)の4名を選出。迎英里子は@KCUAによるキュレーションにてART OSAKA 2017に個展形式で出品(29ページ参照)。水谷昌人は@KCUA企画展の枠組みで育成対象者とした(34-35ページ参照)。また本展への参加をきっかけとして、4名それぞれに複数の展覧会出展依頼や、コレクターへの作品販売などがあり、以後の活動につなげるための一定の成果を上げることができた。



矢野 洋輔 Yosuke Yano



迎 英里子 Eriko Mukai

12-17ページに特集あり
Special feature on pp. 12-17



写真 | 松見 拓也 Photo by Takuya Matsumi

2017.6.10 Sat - 7.2 Sun 京都市立芸術大学芸術資料館収蔵品展

拡張された場におけるアートマネジメント人材育成事業「状況のアーキテクチャー」2017
テーマ1〈物質〉「Transferring Matter: 創造的アーカイブ」
プロジェクト1「物質+感覚民族誌」パイロットプログラム

- 展示室 | @KCUA 1, 2
- 開催日数 | 20日間
- 入場者数 | 1,206人
- 会場構成 | 池田 精堂(京都市立芸術大学美術学部彫刻専攻非常勤講師)
- 企画 | 京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA
- 企画協力 | 佐藤 知久(文化人類学者/京都市立芸術大学芸術資源研究センター専任研究員/准教授)
- 主催 | 京都市立芸術大学
- 助成 | 平成29年度文化庁「大学を活用した文化芸術推進事業」
- 協力 | 行木 敬(文化人類学者/神戸山手大学現代社会学部総合社会学科准教授)
山田 陽一(民族音楽学者/京都市立芸術大学音楽学部音楽学専攻教授)
- 印刷物 | A4判フライヤー デザイン: 松本 久木
「状況のアーキテクチャー」2017年度報告書(55ページ参照)

移動する物質——ニューギニア民族資料

京都市立芸術大学芸術資料館では、学生の卒業作品や美術工芸に関する参考品など、本学の教育活動を背景とした資料を収集している。本展では、その中の特殊なコレクションの一つ、昭和44年(1969年)に美術調査隊によって収集されたニューギニア民族資料を取り上げ、その物質的側面に焦点を当てた展示を行うとともに、移動によって切り離されてしまった、かつてそれらがあった場所に満ちていた非物質的なものを、展示された物質と再び融合させることを試みた。また、研究者たちの協力を得て、音や映像などの非物質的であるが移動可能な資料を用いたレクチャーシリーズを会期中に行い、展示室内の収蔵品の本来の文脈を探った。

Exhibition design by Seido Ikeda (Part-time Lecturer of Sculpture, Kyoto City University of Arts). Curated by Kyoto City University of Arts Art Gallery @KCUA with the cooperation of Tomohisa Sato (Researcher, Kyoto City University of Arts Archival Research Center; Associate Professor of Cultural Anthropology, Kyoto City University of Arts). Organized by Kyoto City University of Arts with additional funding from the Japanese Agency for Cultural Affairs. Presented with the cooperation of Kei Nameki (Cultural anthropologist; Associate Professor of General Social Studies, Kobe Yamate University) and Yoichi Yamada (Professor of Ethnomusicology and Acoustic Anthropology, Kyoto City University of Arts)

Printed matter
A4-sized flyer designed by Hisaki Matsumoto
Situation Design 2017-2018: Report (see p. 55)



- 関連イベント
- 6月10日(土)
○レクチャー 1: 行木敬 ガラリートーク
講師: 行木 敬
 - 6月11日(日)
○レクチャー 2: 藤浩志「切断と接続」
講師: 藤 浩志(美術家/秋田公立美術大学教授) 聞き手: 佐藤 知久
 - 7月2日(日)
○レクチャー 3: 山田陽一・川瀬慈「移動する音と映像」
講師: 山田 陽一、川瀬 慈(映像人類学者/国立民族学博物館准教授)



2017.7.8 Sat - 7.9 Sun 京芸 transmit program: ART OSAKA version

迎英里子「アプローチ7」

- 展示室 | ホテルグランヴィア大阪 26階 6019号室(ART OSAKA 2017会場内)
- 開催日数 | 3日間(7月7日のプレビューを含む)
- 入場者数 | 2,950人
- 企画 | 京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA
- 主催 | ART OSAKA 実行委員会
- 協力 | 京都市立芸術大学
京都市立芸術大学キャリアデザインセンター
ホテルグランヴィア大阪
- 後援 | 京芸友の会
- 印刷物 | A5仕上がり巻三つ折リリーフレット デザイン: 中西 晶子 協力: 仲村 健太郎
たねまきアクア04(54ページ参照)

Curated by Kyoto City University of Arts Art Gallery @KCUA. Organized by the Art Osaka Organizing Committee with the cooperation of Kyoto City University of Arts, Kyoto City University of Arts Career Design Center, and Hotel Granvia, and with support from Kyogeitomonokai (KCUA donors)

Printed matter
A5-sized leaflet (folded in thirds) designed by Akiko Nakanishi with the cooperation of Kentaro Nakamura
Tanemaki Akcua 04 (see p. 54)



- 関連イベント
- 7月7日(金)、7月9日(日)
○迎英里子 パフォーマンス
「アプローチ7.0(イオンチャンネルへ)」

出展作家 | ARTIST
迎英里子
Eriko Mukai

ホテルグランヴィア大阪で開催されるアートフェア、ART OSAKAの特別企画として、「京芸 transmit program 2017」出展作家の迎英里子による個展「アプローチ7」をART OSAKA 2017会場内で開催した。ART OSAKAではこれまで京都市立芸術大学とのコラボレーションにより、将来に大いに期待できる若手作家たちをフェア企画展によって紹介してきた。今年度は、アートフェア会場で通常行われる出品作品の展示販売とは対照的な企画として、自作の装置とパフォーマンスによってさまざまな事象に接近を試みる美術作家、迎英里子による個展「アプローチ7」を開催した。約2分間の新作《アプローチ7.0(イオンチャンネルへ)》はイオンチャンネル型受容体をモチーフとするものであった。会場では定刻のパフォーマンスと使用装置の展示と併せて、装置の一部のレプリカと解説書付きの本作記録映像DVDの予約販売などを行った。



写真 | 片山 達貴 Photo by Tatsuki Katayama

出展作家 | ARTISTS

荒木 優光
Masamitsu Araki
小松 千倫
Kazumichi Komatsu
石塚 俊
Shun Ishizuka
アーカイブスベイ
ARCHIVES PAY

2017.7.8 Sat - 7.23 Sun

シンフォニーLDK

展示室 | @KCUA 1
開催日数 | 14日間
入場者数 | 1,103人
主催 | 京都市立芸術大学
印刷物 | A4判フライヤー、会場配付資料
デザイン: 石塚 俊

Organized by Kyoto City University of Arts

[Printed matter](#)

A4-sized flyer and handout designed by Shun Ishizuka

音や視覚情報を扱い活動するアーティストによる展示企画。現代の物語性を参照しつつ、個別にアクセス可能な様々な状況を聴覚と視覚のバリエーションに微分するなどして制作された作品を、同空間・同時間で多発的に展開した。アーカイブスベイの作品には前谷開、諸江翔太郎、耕三寺功三が参加・協力。音楽や映像など多分野で活躍する出演者が登場するオープニングイベントとクロージングイベントはいずれも盛況であった。

関連イベント

7月9日(日)

○オープニングイベント(ライブスクリーニング・コンサート)
出演: 荒木 優光、小松 千倫、土井 樹* + 石塚 俊、松本 望陸*、村川 拓也、山角 洋平*、Bryant Canelo*
*遠隔地からのストリーミングライブ、スクリーニング

7月23日(日)

○クロージングイベント(ライブパフォーマンス)
出演: 荒木 優光、小松 千倫+石塚 俊、ガブリエ・バロンタン(音声アナウンス)、ヒューゴ・メイラード(映像上映)、涌井 智仁、oboco(ラップスピーカーDJ)



提供 | 笹岡 由梨子 Photo courtesy of Yuriko Sasaoka

出展作家 | ARTIST

笹岡 由梨子
Yuriko Sasaoka

2017.7.8 Sat - 7.23 Sun

笹岡由梨子「Hello Holy!」

展示室 | @KCUA 2, 廊下
開催日数 | 14日間
入場者数 | 1,103人
主催 | 京都市立芸術大学
助成 | 公益財団法人 野村財団
印刷物 | B5仕上がり十字折りフライヤー
デザイン: 仲村 健太郎

Organized by Kyoto City University of Arts with additional funding from the Nomura Foundation

[Printed matter](#)

B5-sized flyer (folded in fourths)
designed by Kentaro Nakamura

笹岡由梨子は、黒子が糸で操るなどのローテクな手法で動くのっぺらぼうの人形が登場する動画を撮影し、その編集過程で人形の顔や手足に実写の顔やパーツをCG合成するなど、往年の特撮映画をも彷彿させる手法で映像作品を制作してきた。誰もが知っているパーツをつなぎ合わせて創り出された誰も見たことのない世界で展開される物語は、すべて緻密な構成・モチーフ設定に基づいており、未知に織り交ぜられた既視、予想の出来ない展開と結末は、観る者に能動的な理解と思考を促す。そこには社会へのクリティカルな視点とユーモアを見出すことができる。

本展「Hello Holy!」にて笹岡は、「建国」をテーマに、アニメーション・実写・ビデオコラージュなど様々な映像形式を用いて制作した2点のビデオインスタレーションと3点のビデオ、そしてそれらに用いた一連のドローイングを発表。「絵画のように鑑賞者が想像力を働かせ、作品と対話を試みる。そんなビデオ作品を作ることは可能か」という、ビデオ作品に対しての笹岡の原点となる考えを強く反映させたものとなった。また、作家が独自に制作した「ホロル語」で話される架空の国の物語は、リファレンスや文化を混ぜ合わせることにより、新しいビデオ表現の可能性に言及している。既存の概念に囚われないカオティックな作品の根底には旧約聖書の十戒や創世記も題材とする壮大なストーリーがあり、「ホロル語」を用いることによって言葉による理解に頼らない、普遍性の高い鑑賞体験を作り出していた。





写真 | 大島 拓也 Photo by Takuya Oshima

2017.8.5 Sat - 8.13 Sun

災害復興支援・芸術活動支援チャリティーオークション SILENT @KCUA 2017 (サイレントアックア)

- 展示室 | @KCUA 1
- 開催日数 | 8日間(台風のため臨時休館あり)
- 入場者数 | 2,658人
- 主催 | 京都市立芸術大学サイレントアックア実行委員会
- 後援 | 京都市
京都市教育委員会
京都市立芸術大学美術学部同窓会
京都市立芸術大学美術教育研究会
- 印刷物 | A4判フライヤー、B3判ポスター、ポストカード デザイン: 仲村 健太郎
B5判カタログ(54ページ参照)

Organized by the Kyoto City University of Arts Silent @KCUA Committee with support from Kyoto City, Kyoto City Board of Education, the Alumni Association of Kyoto City University of Arts (Faculty of Fine Arts), and Kyoto City University of Arts Art Education Society

Printed matter

A4-sized flyer, B3-sized poster, and postcard designed by Kentaro Nakamura
B5-sized catalogue (see p. 54)



チャリティーオークション「SILENT @KCUA(サイレントアックア)」は、東日本大震災をはじめとした災害の復興に関わる活動をしている団体等を広く支援することを目的として、2011年より実施している。入札方法にサイレントオークションを採用し、さらに作家名を伏せて作品を展示するという形式をとっている。本学の学部生、院生、留学生、教員(非常勤含む)、旧教員、卒業生、修了生など本学ゆかりの作家166名から335点が集まった。収益の7割を被災地にて芸術を通じたボランティア活動、支援活動を行っている団体への活動資金として、また3割を京都市立芸術大学に在籍する学生の芸術活動の支援金(留学支援・奨学金)として寄付を行った。なお、2018年11月22日のサイレントアックア実行委員会にて、本事業は2017年度をもって終了することが決議された。

関連イベント

- 8月5日(土)
- SILENT @KCUA 2017/唐仁原希・吉田美希子「Septile」オープニングレセプション

吉田 美希子 Fukiko Yoshida



写真 | 大島 拓也 Photos by Takuya Oshima

出展作家
ARTISTS

- 唐仁原 希
Nozomi Tojinbara
- 吉田 美希子
Fukiko Yoshida

2017.8.5 Sat - 8.20 Sun

唐仁原希・吉田美希子「Septile」

- 展示室 | @KCUA 2, 廊下
- 開催日数 | 14日間(台風のため臨時休館あり)
- 入場者数 | 1,574人
- 主催 | 京都市立芸術大学
- 印刷物 | フライヤー デザイン: 竹内 敦子

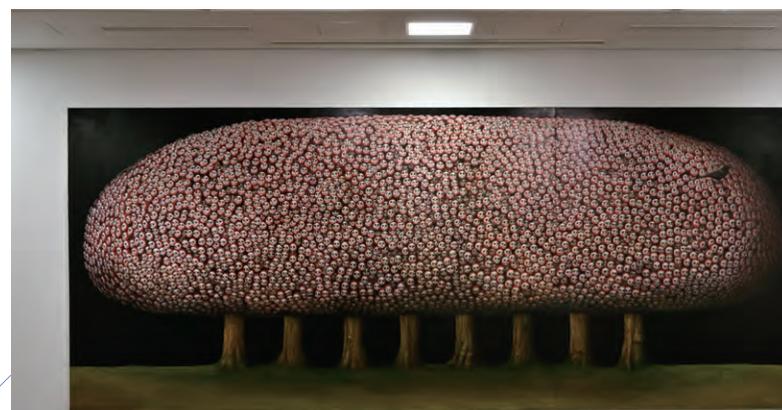
Organized by Kyoto City University of Arts

Printed matter

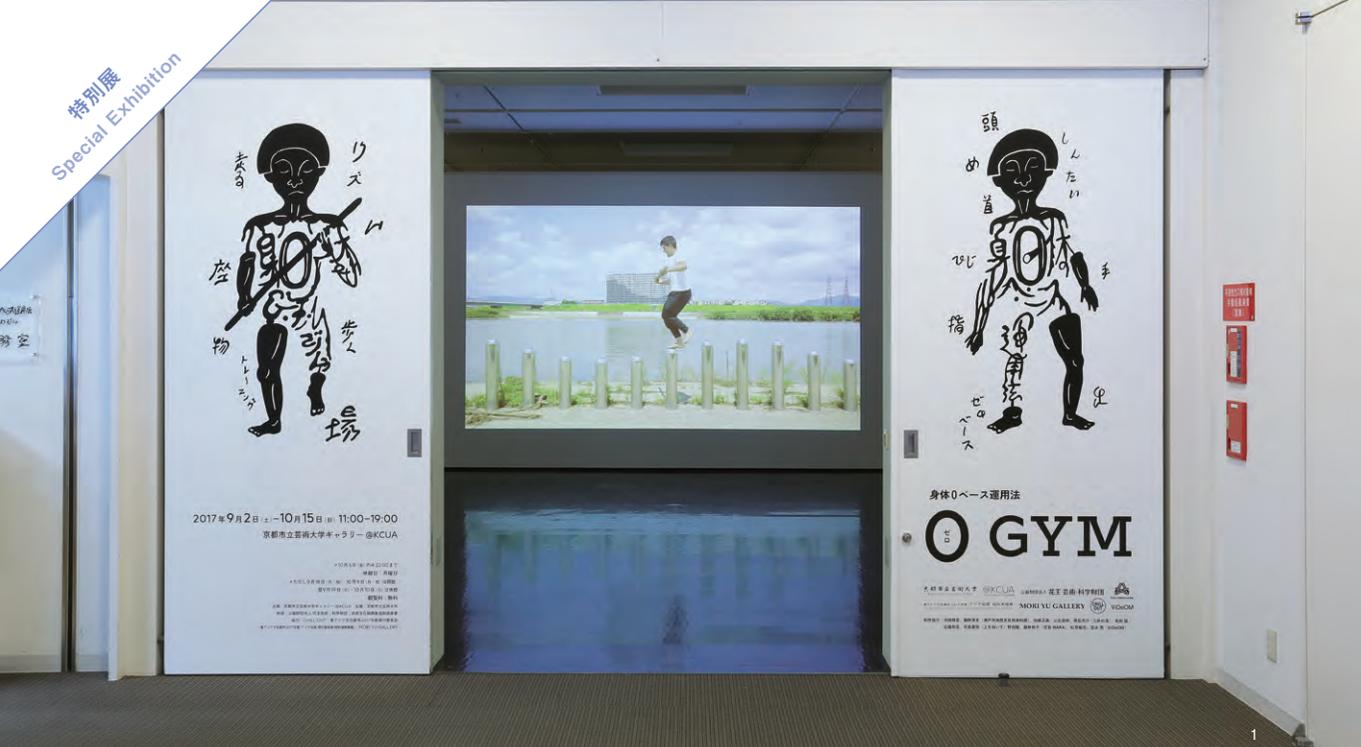
Flyer designed by Atsuko Takeuchi



「Septile」とは360度を7分割した角度を示し、星の配置やそれらがなす角度で人の運命を読み解く西洋占星術の世界では意識の微妙な変化や魂の奥底から来るインスピレーションを象徴すると言われている。本展では自らの内面と純粋に対峙し、それをエネルギーに作品を制作する唐仁原、吉田の二人が、個人の唯一性が希薄になっている現代社会において、作家が個人として社会との関わりを求め、また、その関係性を探り、個人のあり方を提示した。本展は前年に唐仁原と吉田の共同スタジオと職場が同じになったことがきっかけとなり、二人の制作の根源にある「憧れ」、特有の美意識や古典への郷愁、イリュージョンへの陶酔などへの相互の共感が形となったものである。唐仁原は舞台装置のような作品を、吉田は室内装飾的作品を作りたいと考えおり、それぞれ自らにとって新しいアプローチによる実験的な作品を本展にて発表した。



唐仁原 希 Nozomi Tojinbara



出展作家 | ARTIST
パーソナルトレーニング参加作家 | ARTIST PARTICIPATING IN THE PERSONAL TRAINING PROGRAM

安藤 隆一郎
Ryuichiro Ando

今井 菜江
Nae Imai
住吉山 実里
Minori Sumiyoshiyama
真野 綾子
Ayako Mano
水谷 昌人
Masato Mizutani
森 太三
Taizo Mori

2017.9.2 Sat - 10.15 Sun

東アジア文化都市2017京都 アジア回廊 現代美術展 特別連携事業 (同時開催展)

身体0ベース運用法 [0 GYM]

展示室 | @KCUA 1, 2, Gallery A, B, C (共用部を含む堀川御池ギャラリー全館)

開催日数 | 37日間 (台風のため臨時休館あり)

入場者数 | 1,971人

企画 | 京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA

主催 | 京都市立芸術大学

助成 | 公益財団法人 花王芸術・科学財団
芸術文化振興基金助成事業

協力 | CHILL OUT

東アジア文化都市2017京都実行委員会 (東アジア文化都市2017京都 アジア回廊 現代美術展 特別連携事業)
MORI YU GALLERY

印刷物 | A4判フライヤー デザイン: 仲村 健太郎
たねまきアクア03 (54ページ参照)
B5変形判カタログ (54ページ参照)

Curated by Kyoto City University of Arts Art Gallery @KCUA. Organized by Kyoto City University of Arts with additional funding from Japan Arts Council and the Kao Foundation for Arts and Sciences

Printed matter
A4-sized flyer designed by Kentaro Nakamura
Tanemaki Akcua 03 (see p. 54), Exhibition catalogue (see p. 54)



「身体^{ゼロ}ベース運用法」とは、染色作家の安藤隆一郎によって考案された、ものづくりの観点から出発した身体運用法である。「^{ゼロ}GYM」では、物・場所・リズムなど複数のテーマに沿って「身体0ベース運用法」を紹介した。映像や道具などの展示物を鑑賞するだけでなく、実際にトレーニングを体験することも可能とし、また、安藤が公募によって選ばれた美術作家を対象に、2017年春から約半年間に亘って、それぞれの作品制作における身体活用法を開発していく「パーソナルトレーニング」の過程なども公開した。安藤隆一郎ならびに育成対象の美術作家は、会期中に随時、トレーニングを行いながらの公開制作も行った。

写真 1, 2, 4 | 来田 猛 Photos by Takeru Koroda

パーソナルトレーニングコース・認定0トレーナーコース ワークショップ

4月23日(日)、5月7日(日) ○第1回ワークショップ「物編」	6月7日(水) ○第2回ワークショップ「場所編」
6月24日(土) ○第3回ワークショップ「リズム編」	7月12日(水) ○第4回ワークショップ「応用編」

関連イベント

9月2日(土)
○トークイベント「0 Talk」
○オープニングレセプション

9月17日(日)
○身体0ベース運用法「0 Training」「0 Personal Training」「Free 0 Training」
※台風接近のため「0 Training」の日程は10月6日(日) 20:30-21:30に変更、それ以外は中止

9月24日(日)、9月30日(土)、10月7日(土)、10月14日(土)
○身体0ベース運用法「0 Workshop」

10月6日(金)
○ニュー・ブランシュ KYOTO 2017 @KCUA
●展示鑑賞・トレーニング(セルフ)
●Free 0 Training
●具・0
●0 Creation
●0 Training

○朝、目が覚めているにもかかわらず、布団から出られないまま長い時間過ごしてしまうけど、後悔してしまうからなんとかしようとするワークショップ
講師: 今井 菜江 (身体0ベース運用法 パーソナルトレーニング参加作家)

写真 3 | 松見 拓也 Photo by Takuya Matsumi



写真 | 松見 拓也 Photo by Takuya Matsumi

2017.9.23 Sat - 11.5 Sun 土日祝のみ (only on Saturdays, Sundays, and national holidays)

京都市立芸術大学移転整備プレ事業／状況のアーキテクチャー 2017
プロジェクト7「Far Away/So Close: 開かれた共同体」

still moving 2017: 距離へのパトス——far away/so close

- 展示室 | 元崇仁小学校とその周辺
- 開催日数 | 16日間
- 入場者数 | 636人
- 主催 | 京都市立芸術大学
- 企画 | 京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA
- 助成 | 平成29年度文化庁「大学を活用した文化芸術推進事業」
- 協力 | 京都市
東アジア文化都市2017京都実行委員会(東アジア文化都市2017京都 アジア回廊 現代美術展 特別連携事業)
崇仁高瀬川保勝会(京都市立芸術大学を核とするエリアマネジメント)
- 印刷物 | フライヤー デザイン: 松本 久木
B5判報告書 (55ページ参照)

Held at the former Suujin Elementary School and surrounding areas. Organized by Kyoto City University of Arts and planned by Kyoto City University of Arts Art Gallery @KCUA, with additional funding from the Agency for Cultural Affairs and the cooperation of Kyoto City, the Culture City of East Asia 2017 Executive Committee, and Suujin Takasegawa Hoshoukai

Printed matter
Flyer designed by Hisaki Matsumoto
B5-sized book (see p. 55)



プロジェクトメンバー
PROJECT MEMBERS

- 石橋 義正 (美術家・映画監督／京都市立芸術大学美術学部准教授)
Yoshimasa Ishibashi (Artist and film director/Associate Professor of Concept and Media Planning, Kyoto City University of Arts)
- 井上 明彦 (美術家／京都市立芸術大学美術学部教授)
Akihiko Inoue (Artist/Professor of Visual Planning, Kyoto City University of Arts)
- 金氏 徹平 (美術家／京都市立芸術大学美術学部講師)
Teppei Kaneuji (Artist/Lecturer of Sculpture, Kyoto City University of Arts)
- 倉智 敬子 (美術家／京都市立芸術大学美術学部非常勤講師)
Keiko Kurachi (Artist/Part-time Lecturer of Concept and Media Planning, Kyoto City University of Arts)
- 小山田 徹 (美術家／京都市立芸術大学美術学部教授)
Toru Koyamada (Artist/Professor of Sculpture, Kyoto City University of Arts)
- 佐藤 知久 (文化人類学者／京都市立芸術大学芸術資源研究センター専任研究員／准教授)
Tomohisa Sato (Researcher, Kyoto City University of Arts Archival Research Center; Associate Professor of Cultural Anthropology, Kyoto City University of Arts)
- 杉山 雅之 (美術家／京都市立芸術大学美術学部非常勤講師)
Masayuki Sugiyama (Artist/Part-time Lecturer of Concept and Media Planning, Kyoto City University of Arts)
- 高橋 悟 (美術家／京都市立芸術大学美術学部教授)
Satoru Takahashi (Artist/Professor of Concept and Media Planning, Kyoto City University of Arts)
- 畑中 英二 (陶磁史・考古学／京都市立芸術大学美術学部准教授)
Eiji Hatanaka (Associate Professor of Ceramic History and Archaeology, Kyoto City University of Arts)
- 坂東 幸輔 (建築家／京都市立芸術大学美術学部講師)
Kosuke Bando (Lecturer of Architecture, Kyoto City University of Arts)
- 藤田 瑞穂 (京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA 学芸員)
Mizuho Fujita (Curator, Kyoto City University of Arts Art Gallery @KCUA)
- ほか
et al.



写真 | 松見 拓也 Photo by Takuya Matsumi

2023年、京都市立芸術大学はJR京都駅東側エリア、崇仁地域への移転を予定している。この移転の計画が立ち上がって以来、移転整備プレ事業として数々の活動が崇仁地域を中心に京都市内各所で実施されてきた。なかでも「still moving」は、移転後の大学のあり方を探る実験的なプロジェクトとして継続して行っているものである。

第3回となった「still moving 2017: 距離へのパトス——far away/so close」では、「展覧会」というフォーマットに私たちの取り組みを当てはめないことにした。「still moving」と名付けられた期間外にも、移転に向けた活動は続いている。そのため、初めと終わりのあるように見えてしまう「展覧会」ではなく、日々続いている活動をイベント形式で一般公開する期間と位置付けた。

形式にとらわれないということは、今回のテーマである「距離へのパトス——far away/so close」にも表れている。「近くて遠い、遠くて近い」で表されるものは、数値で表すことのできる具体的な距離ではなく、あくまで個人の主観に基づいた感覚になるが、その感覚自体、背景にある文化や環境に左右されるものだと言える。「still moving」では、京都市立

芸術大学と崇仁地域との間を中心にモノ・ヒト・コトの「移動」を軸とする実験を通して、この「移動」がそれぞれにもたらすものについて考察してきたが、これには、「far away/so close」といった距離の感覚を生じさせている、文化や環境という条件を一度フラットにし、解体あるいは再構築しようという意図もある。

芸術大学というものは、しばしば社会から一つ線を隔てたもののように捉えられるが、郊外型キャンパスから街中に移転した新たな大学は、社会と常に接点を持ちながら、互いに作用し、変化し続けるものとなるだろう。拡張された場における新しい芸術大学のあり方を探る「still moving」のプロジェクトは、その名の通り、流動体のようにとどまることなく動いていくのである。

期間中は大きく分けて9つのプロジェクトやイベントを並行して実施し、終了後もプロジェクトメンバーによるスピノフプログラムとして「壁塗りワークショップ」が行われた。「壁塗りワークショップ」を経た職員室はその後「ギャラリー崇仁」と名付けられ、若手作家を支援するための移転整備プレ事業「教室のフィロソフィー」を中心とした展示が行われている。



写真 | 松見 拓也 Photo by Takuya Matsumi

プロジェクト・イベント

- アナ☆ボル
プロジェクトメンバー：高橋 悟+倉智 敬子、杉山 雅之、畑中 英二
会場：元崇仁小学校 更衣室(北館1階)
・9月23日(土・祝) 考古学フィールドツアー+レクチャー 講師：畑中 英二
・9月30日(土) 土練り鍾馗人形制作ワークショップ 講師：倉智 敬子、高橋 悟、畑中 英二
・10月9日(月・祝)-11月5日(日) キコエナイヲキク 担当：倉智 敬子
・11月4日(土)、11月5日(日) 「アナ☆ボル」体験カラオケ 担当：高橋 悟
- Re Play: 未完の記譜法
プロジェクトメンバー：高橋 悟+倉智 敬子、石橋 義正ほか
会場：元崇仁小学校 体育館
・10月29日(日) 映画ワークショップ「トボグラフィックシネマ×シネマティックボディ」
講師：石橋 義正、小西 小太郎(プログラマー)、立川 晋輔(映像作家)
- ワークショップ “We are between the Sun and the Earth”——太陽と地球のあいだで
9月23日(土・祝)、10月9日(月・祝)
講師：杉山 雅之、杉山 優子(造形作家) 会場：元崇仁小学校 敷地内各所
- フローとストック
9月23日(土・祝)-11月5日(日)
プロジェクトメンバー：金氏 徹平、今井 菜江、岡田 真輝、河原 功也、関 人愷、後藤 多美、小林 椋、小松 千倫、坂本 直、許 芝瑤、進士 三紗、園田 唯、竹原 詩織、谷口 かな、谷為 麻由、中迫 梨恵、neco(ねこ)、平田 万葉、福永 佑衣、藤田 紗衣、堀 花圭、前田 耕平、水野 佑紀、宮木 亜菜、本山 ゆかり、森 堇、陸 瑋妮
会場：元崇仁小学校 図書館(北館2階)
- 金氏徹平「tower (THEATER)」公開稽古
9月23日(土・祝)、24日(日)、30日(土)、10月7日(土)、8日(日)、9日(月・祝)
プロジェクトリーダー：金氏 徹平 会場：元崇仁小学校 体育館
- 「高校生の考える京芸移転」発表会
10月1日(日) 講師：坂東 幸輔 会場：元崇仁小学校 敷地内各所
- 崇仁高瀬川保勝会+井上明彦
プロジェクトリーダー：井上 明彦
会場：崇仁保育所北側の高瀬川、元崇仁小学校内の高瀬川ほか
・10月8日(日)-30日(月) 高瀬川にテラスをつくる ※準備・撤収を含む
・10月7日(土)、22日(日)、11月4日(土) 高瀬川のそうじと崇仁高瀬川保勝会の活動 ※22日は中止
・10月28日(土) 「我ら、山水河原者の末裔なり」記念シンポジウム
主催：京都市、NPO法人崇仁まちづくりの会 会場：崇仁船鉾保管庫
・11月4日(土) 川どここそこー崇仁テラススケッチー
担当：遠藤 亜季(京都市立芸術大学大学院美術研究科修士課程 絵画専攻 油画 在籍 M2)
- 第7回 漂流するアクアカフェ
プロジェクトメンバー：井上 明彦、むらた ちひろ、山田 毅
会場：崇仁保育所北側の高瀬川、元崇仁小学校内の高瀬川ほか
・10月22日(日) ワークショップ「まちの景色を染める水」企画：むらた ちひろ
・10月22日(日) トーク「川は青かった——〈テラス〉と〈河原〉」
ゲスト：森本幸裕(景観生態学/ランドスケープデザイン/京大名誉教授)、やなぎみわ(美術家/演出家/京都造形芸術大学教授)
※台風のため一旦中止し、元崇仁小学校 体育館内で実施
- Moving Terrace Works
プロジェクトメンバー：坂東 幸輔、藤田 瑞穂、熊野 陽平、岸本 光大、中田 有美、永田 絵里、西尾 咲子
・10月14日(土) RAD「彷徨う採集車」
担当：RAD - Research for Architectural Domain - ほか 会場：元崇仁小学校 コンピューター室(北館1階)、周辺の路上など
・9月23日(土)、10月15日(日)、11月5日(日) クレープ屋台
担当：ガブリエ・パロンタン 会場：元崇仁小学校(9月23日・11月5日)、平成の京町家 モデル住宅展示場 KYOMO内広場(10月15日)
・10月15日(日) Moving Market 会場：平成の京町家 モデル住宅展示場 KYOMO内広場
- still moving 2017 スピノフプログラム「壁塗りワークショップ」
2018年1月13日(土) 講師：坂東 幸輔 会場：元崇仁小学校 職員室(北館1階)



写真 | 来田 猛 Photo by Takeru Koroda

出展作家 | ARTIST
アリン・ルンジャー
Arin Rungjang

2-11ページに特集あり
Special feature on pp. 2-11

2017.10.28 Sat - 11.26 Sun

アリン・ルンジャー「モンクット」

展示室 | @KCUA 1, 2
開催日数 | 26日間
入場者数 | 1,177人
企画 | 京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA
主催 | 京都市立芸術大学
助成 | 公益財団法人 朝日新聞文化財団
協力 | Gallery Ver
東アジア文化都市2017京都実行委員会(東アジア文化都市2017京都 アジア回廊 現代美術展 特別連携事業)
Future Perfect
印刷物 | A4判フライヤー デザイン:尾中 俊介(Calamari Inc.)

Curated by Kyoto City University of Arts Art Gallery @KCUA. Organized by Kyoto City University of Arts with additional funding from the Asahi Shimbun Foundation, and with the cooperation of Culture City of East Asia 2017 Executive Committee, Future Perfect, and Gallery Ver

Printed matter
A4-sized flyer designed by Shunsuke Onaka (Calamari Inc.)

タイの歴史を出発点とする作品で知られる現代美術家、アリン・ルンジャーの日本初の個展「モンクット」を開催した。

2015年フランスで発表された《モンクット》は、「モンクット王」として知られるラーマ4世が自らが受け継いだ王冠を二度複製し、二つ目のレプリカを1861年にフランスに渡った大使を通してナポレオン3世に贈ったという、歴史上の知られざる出来事が出発点となっている(「モンクット」はタイ語で「王冠」を意味する)。1782年に作られたタイ王国の正式な王冠の1861年のレプリカを元に更に複製した、ラーマ4世の子孫にあたる職人の手による新しいレプリカを、同職人も登場する映像などと併せた複合的なインスタレーション作品である。今回の個展では、ドクメンタ14(2017)への招聘のきっかけにもなった本作に新たな要素を加え、初めてフランス国外で展示した。

本展の実施にあたり、ルンジャー氏はまず7月に@KCUAで下見を行い、また10月の半月ほどの滞在期間中に本学学生を対象とした特別授業や、一般来場者を対象としたギャラリートークを行った。

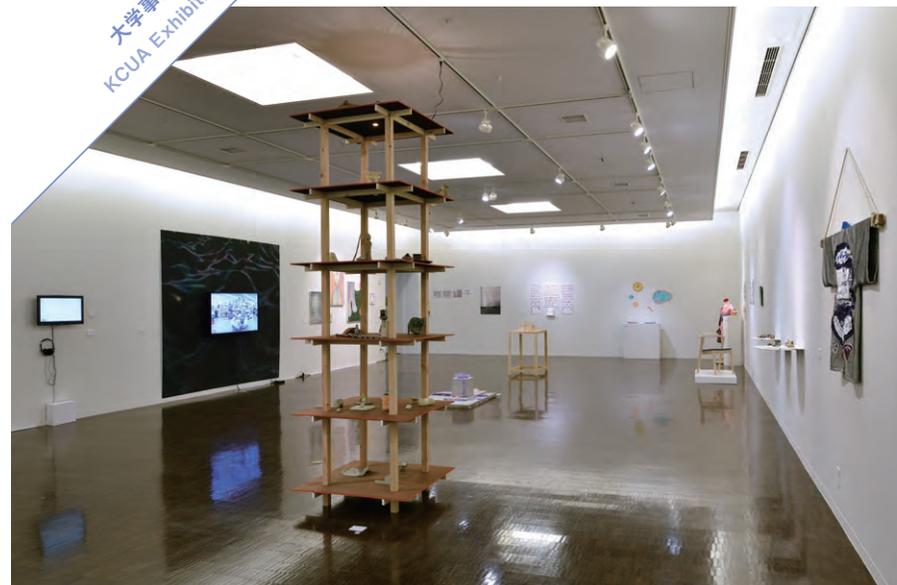


写真 | 大島 拓也 Photo by Takuya Oshima

2017.11.30 Thu - 12.10 Sun

京都市立芸術大学 第28回 留学生展

展示室 | @KCUA 1, Gallery A
開催日数 | 10日間
入場者数 | 580人
主催 | 京都市立芸術大学
印刷物 | A4判フライヤー デザイン:林 婷

Organized by Kyoto City University of Arts

Printed matter
A4-sized flyer designed by Lin Ting

関連イベント
11月30日(木)
○ギャラリートーク
○オープニングレセプション 兼 留学生交流パーティー



本学では、留学生の受入環境の整備や支援の充実を図るとともに、京都の文化芸術に親しむ機会の提供、更には市民との交流機会の拡大の取組みを進めている。本展は、本学に在籍する世界各国からの留学生のうち、修士課程の本科留学生、研究留学生、交換留学生による毎年恒例の展覧会である。第28回となる今回はアメリカ、インドネシア、オーストラリア、韓国、コンゴ、スペイン、タイ、台湾、中国、フランスからの留学生31名が出展した。

- 殷之貝(イン シ カイ)
Yin Zhi Bei
- ジョスリン・ウィラウアー
Joslyn Willauer
- 呉在現(オ ジェヒョン)
Oh Jaehyun
- 王夢石(オウ ム セキ)
Wang Mengshi
- ガブリエ・バロンタン
Valentin Gabelier
- マティアス・ガルシア
Matthias Garcia
- 関人愷(カン ジン ガイ)
Guan Ren Kai
- 金 皎秀(キム ミンス)
Kim Minsoo
- ホルヘ・シメーリヨ
Jorge Simelio
- ジョン・ジェーグウ
Jean Gégout
- 周 妍(シュウ ケン)
Zhou Yan
- 徐子倚(ジョ シイ)
Xu Zi Yi
- 肖カ三(ショウ リーサン)
Xiao Lisan
- 申セミ(シン セミ)
Shin Sai Mi
- 詹 涵逸(チャン ハン イ)
Chan Han Yi
- 張 翕慧(チョウ ショウ ケイ)
Zhang Xiao Hui
- 張 瑜芳(チョウ ユ ホウ)
Chang Yu Fang
- 田 玥華(ティエン ユエ ホウ)
Tien Yueh Hwa
- クレモン・デルフィ
Clément Dreuilh
- ジョン=ポール・トラン
John-Paul Trang
- タニア・パウリン
Tania Paulin
- ナッタノン・バイポーウォン
Nattanon Baiphowongse
- Beheim 雪絵(バーハイム ユキエ)
Yukie Beheim
- ムブーガ・メニ
Mbugha Meni
- 楊 妹菲(ヨウ シュ ヒ)
Yang Shu Fei
- 李 東芹(リ トウ キン)
Li Dong Qin
- 劉 信(リュウ シン)
Liu Xin
- 劉 夢儒(リュウ ム ジュ)
Liu Mengru
- 林 婷(リン テイ)
Lin Ting
- 陸 瑋妮(ル ウェイ ニ)
Lu Wei Ni
- 盧 柔安(ロ ジュウ アン)
Lu Jou An



2017.12.2 Sat - 12.10 Sun

状況のアーキテクチャー 2017 プロジェクト3
うつしから学ぶ

展示室 | @KCUA 2
 開催日数 | 8日間
 入場者数 | 477人
 企画 | 京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA
 京都市立芸術大学芸術資源研究センター
 状況のアーキテクチャー 2017 プロジェクト3「うつしから学ぶ」
 主催 | 京都市立芸術大学
 助成 | 平成29年度文化庁「大学を活用した文化芸術推進事業」
 印刷物 | B2判ポスター デザイン：中田 有美
 「状況のアーキテクチャー」2017年度報告書(55ページ参照)

Planned by Kyoto City University of Arts Art Gallery @KCUA, Kyoto City University of Arts Archival Research Center, and KCUA Situation Design 2017: Project 3 - Utsushi kara manabu. Organized by Kyoto City University of Arts with additional funding from the Agency for Cultural Affairs

Printed matter
 B2-sized poster designed by Yumi Nakata
 Situation Design 2017-2018: Report (see p. 55)

写真 | 大島 拓也 Photo by Takuya Oshima

拡張された場におけるアートマネジメント人材育成事業「状況のアーキテクチャー」2017年度テーマ1〈物質〉「Transferring Matter: 創造的アーカイブ」プロジェクト3「うつしから学ぶ」では、京都市立芸術大学芸術資料館が収蔵している資料や伝統音楽の譜面を用いて、「うつす」行為によって別の形態や様式が発露するさまを体感できる三つのワークショップを開催した。また、その「うつし」の教育現場での活用法の会得を目標とした。受講者は三つのワークショップから各対象に合うものを選んで参加し、本展においてその成果を展示・発表した。

ワークショップ

- 12月2日(土)
○山水画のジオラマをつくる
講師：竹浪 遠(東洋美術史/京都市立芸術大学美術学部准教授)
- 12月3日(日)
○レゴブロックでうつす
講師：森野 彰人(陶磁器作家/京都市立芸術大学美術学部准教授)
- 12月10日(日)
○能楽の五人囃子を体にうつしとる
講師：藤田 隆則(伝統音楽研究/京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター教授)



出展作家 | ARTIST
 西田 真人
 Masato Nishida

京都市立芸術大学美術学部日本画専攻教授の西田真人の退任記念展。2008年に本学教授に就任する前の第1章「〈光〉の恩寵」、就任以後の第2章「大枝沓掛の10年」、そしてしばしば訪れているイギリスの風景をまとめた第3章「英国の旅」の三部構成で23点の作品を展示した。

関連イベント

- 12月16日(土)
○ギャラリートーク vol. 1: 作品解説
講師：西田 真人
- 1月6日(土)
○ギャラリートーク vol. 2: 記念講演「私と日本画 —芸大生の時、教員の時—」
講師：西田 真人

2017.12.15 Fri - 2018.1.8 Mon

京都市立芸術大学退任記念
西田真人展 —絵事循環—

展示室 | @KCUA 1, 2
 開催日数 | 17日間
 入場者数 | 1,792人
 主催 | 京都市立芸術大学
 印刷物 | A4判フライヤー、B2判ポスター デザイン：小林意匠設計事務所

Organized by Kyoto City University of Arts

Printed matter
 A4-sized flyer and B2-sized poster designed by Kobayashi Isho Sekkei Jimusho

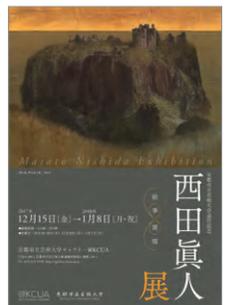


写真 | 葛西 亜理沙 Photos by Arisa Kasai

出展作家
— ARTISTS

- 池田 精堂×エリカ・リラックス
Seido Ikeda & ERIKARELAX
- 石井 亨
Toru Ishii
- 牛込 陽介(Takram)
Yosuke Ushigome (Takram)
- トーマス・トウエイツ
Thomas Thwaites
- 宮崎 啓太
Keita Miyazaki
- 李 豪哲
Lee Hochoul



トーマス・トウエイツ
Thomas Thwaites



李 豪哲
Lee Hochoul



石井 亨
Toru Ishii



宮崎 啓太
Keita Miyazaki



池田 精堂×エリカ・リラックス
Seido Ikeda & ERIKARELAX



牛込 陽介(Takram)
Yosuke Ushigome (Takram)

出展作家
— ARTISTS

- 植田 隆太
Ryuta Ueda
- 岡村 寛生
Hiroki Okamura
- 金田 勝一
Shoichi Kaneda
- 川田 有宏
Tomohiro Kawata
- 北原 美保
Miho Kitahara
- 佐藤 有紀
Yuki Sato
- 舌 忠之
Tadayuki Zetsu
- 竹ノ内 郁
Iku Takenouchi
- 辻野 陽子
Yoko Tsujino
- 豊永 政史
Seiji Toyonaga
- 中村 奈緒美
Naomi Nakamura
- 福井 敦子
Atsuko Fukui
- 藤田 匠平
Shohei Fujita
- 山下 華世子
Kayoko Yamashita
- 山田 道夫
Michio Yamada
- 山元 彩乃
Ayano Yamamoto
- 渡部 睦子
Chikako Watanabe

※作家名は作品制作時点/ローマ字表記は確認できていない場合があります
Artist names given as of year of production. Romanizations are not all confirmed

2018.2.17 Sat - 3.4 Sun
京都市立芸術大学美術学部同窓会展
部屋と宇宙と眠らない夜
——1990年代前半を中心に



- 展示室 | @KCUA 1
開催日数 | 14日間
入場者数 | 4,555人
企画 | 京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA
状況のアーキテクチャー 2017 プロジェクト2「Still Moving: The '80s」
主催 | 京都市立芸術大学
京都市立芸術大学美術学部同窓会象の会
助成 | 平成29年度 京都市立芸術大学 特別研究助成 2017-004
印刷物 | A4判フライヤー デザイン: 柳澤 裕樹(サクサクデザイン)
「状況のアーキテクチャー」2017年度報告書(55ページ参照)

Curated by Kyoto City University of Arts Art Gallery @KCUA and KCUA Situation Design 2017: Project 2 - Still Moving: The '80s. Organized by Kyoto City University of Arts and the Alumni Association of Kyoto City University of Arts (Faculty of Fine Arts) with additional funding from the Kyoto City University of Arts 2016-17 Special Research Grant 2017-004

Printed matter
A4-sized flyer designed by Yuki Yanagisawa (Saku Saku Design)
Situation Design 2017-2018: Report (see p. 55)

関連イベント

- 2月17日(土)
○ギャラリートーク
モデレーター: 原 久子(アートプロデューサー/大阪電気通信大学教授)
○「移動する物質——十字路口としてのアフガニスタン」との合同オープニングレセプション
- 2月18日(日)
○アーカイバル・ワークショップ
講師: 石谷 治寛(京都市立芸術大学芸術資源研究センター研究員)
- 2月23日(金)
○眠らない夜のアーカイブ会議 第1夜
講師: 原 久子
- 3月3日(土)
○眠らない夜のアーカイブ会議 第2夜
講師: 島 敦彦(金沢21世紀美術館館長)

2018.1.13 Sat - 2.12 Mon

思考する技術

- 展示室 | @KCUA 1, 2
開催日数 | 27日間
入場者数 | 1,788人
主催 | 「思考する技術」実行委員会
京都市立芸術大学
助成 | 公益財団法人 野村財団
公益財団法人 朝日新聞文化財団
グレートブリテン・ササカワ財団
印刷物 | A4判フライヤー デザイン: 清水 龍之介
A5判展覧会カタログ 制作・発行: 池田 精堂、宮崎 啓太、李 豪哲
発行日: 2018年12月25日

Organized by the "Artist Social Reproduction" Project Team and Kyoto City University of Arts with additional funding from Nomura Foundation, the Asahi Shimbun Foundation, and the Great Britain Sasakawa Foundation

Printed matter, etc.
A4-sized flyer designed by Ryunosuke Shimizu
A5-sized exhibition catalogue produced and published by Seido Ikeda, Keita Miyazaki, and Hochoul Lee on December 25, 2018

ロンドンでの交流などを通じて知り合った7名6組の作家たちによる、生産と技術とをテーマとした展覧会。同世代の出展作家たちは、社会における生産活動と技術との関係性に関心をもち、制作の中にそれを表現することを一つの共通項としている。技術の進歩や変遷と社会との関係性への着目、生産する側と消費する側の関係性についての考察、あるいは創作活動の視点から「アート」の評価基準について再検証する試みなど、異なったアプローチや手法を用いながらも、それぞれの作品には、各自がこれまでの制作活動と培って来た技術を手がかりに、モノを作ることと現代社会との接点を探ろうとする姿勢が表れている。彼らの作品が一堂に会することで立ち現れてくる問いによって、展示空間は自ずと、社会における芸術の役割を改めて考えるための場となった。

関連イベント

- 1月13日(土)
○ギャラリートーク
ゲストスピーカー: 佐藤 知久(文化人類学者/京都市立芸術大学芸術資源研究センター専任研究員/准教授)
○池田精堂×エリカ・リラックスによるデモンストレーション
○交流会
- 2月11日(日)
○池田精堂×エリカ・リラックスによるデモンストレーション
ゲストスピーカー: プノワ・ベルヴィル(空中ブランコ集団シルク・ヴォスト リーダー)
○日本とイギリスの美術教育
登壇者: 西條 茜、水無瀬 翔、本展出品作家(池田 精堂、宮崎 啓太、エリカ・リラックス)
ゲストスピーカー: 小山田 徹(美術家/京都市立芸術大学美術学部彫刻専攻教授)



写真 | 大島 拓也 Photo by Takuya Oshima

1980年代の卒業・修了作品を中心に紹介した2016度の同窓会展に引き続き、1990年代前半の作品を扱った。1990年代前半とは、国外においては東西ドイツの統一と冷戦終結、ソ連解体とグローバル化の加速、湾岸戦争での多国籍軍によるイラクへの攻撃などが、日本国内においては、バブル経済のピークからその崩壊、そして阪神・淡路大震災、地下鉄サリン事件が人々に大きな衝撃を与え、のちの社会を大きく動かすことになる現象や出来事のあった激動の時代であった。美術界の動きとしては、このような社会の動きから、自らの新たな立ち位置を模索するような傾向が見られるようになる。また、貸画廊ではなく、オルタナティブな作品発表の場所を自分たちで開拓していくような動きも若手作家の中で活発化するのだが、本学学生たちも例外ではなく、学生の下宿アパートなどさまざまな場所を展示の場として使用するようになっていく。90年代前半は、バブル崩壊から「失われた20年」とも呼ばれる長く続いた不景気の始まりというネガティブなイメージで捉えられがちな時代でもあるが、本展にて展示した作品からは、この時期特有の若き表現者たちの躍動感、高揚感を見て取ることができた。また、同じく2016年度の同窓展に引き続き、資料研究(状況のアーキテクチャー2017 プロジェクト2「Still Moving: The '80s」)の発表の場としての「アーカイバル・プラクティス・ラボ」の公開も合わせて実施した。二つの壁面にはプロジェクトメンバーによって制作された80年代から90年代前半の年表と京都市内の地図とを設置した。来場者も自由に情報を付け加えることを可能としたところ、同窓会生からは当時の本学や学生の動向に関する情報が、また一般の来場者からはより広い視点での情報が得られた。また、「眠らない夜のアーカイブ会議」と題して、原久子氏には主に編集者としての視点から、島敦彦氏にはキュレーターとしての視点から捉えられた当時の状況を語っていただいた。「部屋と宇宙と眠らない夜」では、収蔵場所の問題もあり買上対象から外れたこともあって彫刻作品の展示がなかったのだが、1992年に国立国際美術館にて開催された「彫刻の遠心力」展についての島氏による詳細な解説は、それを補完して余りある貴重なものとなった。

2018.2.17 Sat - 3.4 Sun

状況のアーキテクチャー 2017
プロジェクト1「物質+感覚民族誌」成果発表展
移動する物質——十字路としてのアフガニスタン

展示室 | @KCUA 2
開催日数 | 14日間
入場者数 | 4,524人
企画 | 河野 愛、中島 明日香、増田 和子、矢野原 佑史(状況のアーキテクチャー 2017 プロジェクト1「物質+感覚民族誌」受講者)
監修: 佐藤 知久(文化人類学者/京都市立芸術大学芸術資源研究センター専任研究員/准教授)
藤田 瑞穂(京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA 学芸員)
プロジェクトマネジメント: 西尾 咲子(「状況のアーキテクチャー」シニアプログラムコーディネーター)
主催 | 京都市立芸術大学
助成 | 平成29年度文化庁「大学を活用した文化芸術推進事業」
印刷物 | A4判フライヤー デザイン: 柳澤 裕樹(サクサクデザイン)
「状況のアーキテクチャー」2017年度報告書(55ページ参照)

Curated by Ai Kawano, Kazuko Masuda, Asuka Nakashima, Yushi Yanohara (Situation Design 2017: Project 1 students)
Supervised by Tomohisa Sato (Researcher, Kyoto City University of Arts Archival Research Center; Associate Professor of Cultural Anthropology, Kyoto City University of Arts) and Mizuho Fujita (Curator, Kyoto City University of Arts Art Gallery @KCUA)
Project management by Sakiko Nishio (Senior Program Coordinator, Situation Design)
Organized by Kyoto City University of Arts with additional funding from the Agency for Cultural Affairs

Printed matter
A4-sized flyer designed by Yuki Yanagisawa (Saku Saku Design)
Situation Design 2017-2018: Report (see p. 55)



拡張された場におけるアートマネジメント人材育成事業「状況のアーキテクチャー」では、2017年度は《物質》《生命》《社会》というテーマのもとに七つのプロジェクトを展開した。大学が有する多岐に渡る資料体(作品・楽譜・文献・資料)の「創造的な活用方法」を探り、ジャンルを超えたモノの見方や新たな価値を創出することを目指した「テーマ1《物質》Transferring Matter: 創造的アーカイブ」の三つのプロジェクトのうちの一つ、「物質+感覚民族誌」では、本学芸術資料館に収蔵されている民族資料を、感覚民族誌学の視点から再検証した。本プロジェクトの受講者は、半年間にわたり学内外のさまざまな機関や施設でのレクチャーや展示見学ツアー、映像上映会、セミナーなどに参加しながら、民族芸術学や感覚民族誌についての知見を深めていった。本展はこのプロジェクトの成果発表として、1973年に本学教員5名(八木一夫、佐藤雅彦、田村隆照、冬木理沙男、山崎脩)が「彫刻・工芸における地中海・オリエント意匠の東漸に関する調査」の一環で中近東を横断した際に持ち帰った後に本学芸術資料館に「アフガニスタン民族資料」として収蔵された生活用品を、新たな解釈と独自の視点で捉え直して展示した。講師の佐藤知久と4名の受講者がそれぞれ展示を企画し、佐藤知久「ふつうの展示」、矢野原佑史「Polyphonic Mono-Logues」、中島明日香「perspective——モノの存在」、河野愛「収蔵品ホームステイログ」、増田和子「『曖昧さ』で隔てを越える」の五つのブースから成る展示構成となった。

写真 | 大島 拓也 Photo by Takuya Oshima



関連イベント

- 2月17日(土)
○「部屋と宇宙と眠らない夜——1990年代前半を中心に」との合同オープニングレセプション
- 2月24日(土)
○大喜利ワークショップ ○十字路茶会



2018.3.10 Sat - 3.25 Sun

藤原隆男 京都市立芸術大学退任記念展
ほしをみるひと

展示室 | @KCUA 1, 2
開催日数 | 14日間
入場者数 | 1,453人
主催 | 京都市立芸術大学
印刷物 | A4判フライヤー デザイン: 辰巳 明久

Organized by Kyoto City University of Arts

Printed matter
A4-sized flyer designed by Akihisa Tatsumi



本学美術学部での研究教育、大学内の情報基盤の充実などさまざまな面で本学を支えた宇宙物理学者・藤原隆男教授の退任を記念し、宇宙へのまなざしの薫陶を受け、研究教育を共にした美術家・教員・卒業生・現役学生とともに、「ほしをみるひと」として地上の価値の序列にとらわれず、銀河的視野で芸術と芸術教育のあり方を探求する本学美術学部のユニークな一局面を提示した。

参加協力者等 | PARTICIPANTS AND COLLABORATORS

- 藤原 隆男
Takao Fujiwara
- 秋山 陽
Yo Akiyama
- 出口 義子
Yoshiko Deguchi
- 深谷 訓子
Michiko Fukaya
- 福嶋 敬恭
Noriyasu Fukushima
- 五明 真
Makoto Gomyo
- 長谷川 直人
Naoto Hasegawa
- ひろい のぶこ
Nobuko Hiroi
- 井上 明彦
Akihiko Inoue
- 河野 愛
Ai Kawano
- 小島 徳朗
Tokuro Kojima
- 小清水 漸
Susumu Koshimizu
- 熊田 悠夢
Yumu Kumada
- 前田 菜月
Natsuki Maeda
- 松井 紫朗
Shiro Matsui
- 松尾 芳樹
Yoshiki Matsuo
- むらたちひろ
Chihiro Murata
- 中原 浩大
Kodai Nakahara
- 中ハシ 克シゲ
Katsushige Nakahashi
- 二瓶 晃
Akira Nihei
- 野村 仁
Hitoshi Nomura
- 扇 千花
Chika Ohgi
- 大里 真瑛子
Mieko Osato
- 塩見 允枝子 *特別協力
Mieko Shiomi *Special collaborator
- 重松 あゆみ
Ayumi Shigematsu
- 田中 美帆
Miho Tanaka
- 谷本 研
Ken Tanimoto
- 辰巳 明久
Akihisa Tatsumi
- 寺島 みどり
Midori Terashima
- 砥綿 正之
Masayuki Towata

イベント他
Events, etc.

「im/pulse: 脈動する映像」リサーチプログラム

Research Program for *im/pulse: Vincent Moon, contact Gonzo, and the Anthro-film Laboratory*

「感覚民族誌」的観点からみて優れたアプローチをとる実践や、身体深部の感覚や感性の作用を問う表現に着目した2018年度特別展「im/pulse: 脈動する映像」のリサーチの一環として、出展予定作家のヴァンセント・ムーン、contact Gonzo、Anthro-film Laboratoryメンバーを招いて公開型のレクチャーや上映会などを行った。



写真 | 守屋 友樹 Photos by Yuki Moriya

2017.12.20 Wed 19:00-22:00

拡張された場におけるアートマネジメント人材育成事業「状況のアーキテクチャー」2017
テーマ1〈物質〉「Transferring Matter: 創造的アーカイブ」プロジェクト1「物質+感覚民族誌」スピノフプログラム

ヴァンセント・ムーン×contact Gonzo×川瀬 慈 トークセッション&ヴァンセント・ムーン映像上映

Situation Design 2017: Project 1 Spin-off Program
Talk session by Vincent Moon, contact Gonzo, and Itsushi Kawase & Film screening by Vincent Moon

- 会場 | Gallery A
- 言語 | 英語・日本語、逐次通訳(英日)あり
- 入場者数 | 76人
- 企画 | 京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA
- 主催 | 京都市立芸術大学
- 助成 | 平成29年度文化庁「大学を活用した文化芸術推進事業」
- 協力 | 『響・HIBIKI』製作委員会
- 印刷物 | A4判フライヤー デザイン: 松本 久木
「状況のアーキテクチャー」2017年度報告書(55ページ参照)
たねまきアクア04(54ページ参照)



Planned by Kyoto City University of Arts Art Gallery @KCUA.
Organized by Kyoto City University of Arts with additional funding from the Agency for Cultural Affairs, and with the cooperation of Hibiki: Echoes of Japan Production Committee

Printed matter
A4-sized flyer designed by Hisaki Matsumoto
Situation Design 2017-2018: Report (see p. 55)
Tanemaki Akua 04 (see p. 54)



登壇者 | SPEAKERS
ヴァンセント・ムーン
Vincent Moon
contact Gonzo
塚原 悠也
Yuya Tsukahara
三ヶ尻 敬悟
Keigo Mikajiri
松見 拓也
Takuya Matsumi

川瀬 慈(国立民族学博物館准教授)
Itsushi Kawase (Associate Professor, Department of Advanced Human Sciences, National Museum of Ethnology)

進行 | MODERATOR
佐藤 知久(文化人類学者/京都市立芸術大学芸術資源研究センター専任研究員/准教授)
Tomohisa Sato (Researcher, Kyoto City University of Arts Archival Research Center; Associate Professor of Cultural Anthropology, Kyoto City University of Arts)

初回は著名なロックスターから小さな村の合唱団、秘境のシャーマニズム儀礼まで、世界各地の音楽家を対象に、独自のシネマ・ヴェリテの手法で映像作品を制作するフランス出身の映像作家ヴァンセント・ムーンを迎えて、トークセッションと映像作品上映を行った。トークセッションでは、即興的な身体接触から始まるパフォーマンス・映像・写真など発表形態を固定しない活動で注目を集めるcontact Gonzoと、アフリカの音楽文化に関する研究ならびに映像制作に取り組む人類学者の川瀬慈が加

わり、それぞれの最新の実践についてプレゼンテーションを行うとともに、3組の協働によりさらに拡張された領域に突入する表現の創出に向けた対話を行った。映像作品上映では、ヴァンセント・ムーンがこれまでに世界各地で撮った映像作品からセレクトし上映した。「文化人類学・民族誌学」と「アート」という二つの文脈の交差として読み取ることのできる表現を超えて、従来の学問や芸術それぞれのアーキテクチャー(枠組み・構造)自体を拡張し発展させる試みへとつなげていく第一歩となった。

2018.1.25 Thu 18:00-20:00

拡張された場におけるアートマネジメント人材育成事業「状況のアーキテクチャー」2017
テーマ1〈物質〉「Transferring Matter: 創造的アーカイブ」プロジェクト1「物質+感覚民族誌」スピノフプログラム
Anthro-film Laboratory 28

座談会：デジタルメディア時代の人類学 —映像で他者を想像する—

Situation Design 2017: Project 1 Spin-off Program/Anthro-film Laboratory 28
Round-table discussion on anthropology in the age of digital media

登壇者 | SPEAKERS
太田 光海(マンチェスター大学社会人類学・映像メディア博士課程在籍)
Akimi Ota (PhD candidate, Social Anthropology and Film and Media Studies, University of Manchester)
ふくだ べろ/福田 浩久(マンチェスター大学映像人類学修士)
fukduapero/Hirohisa Fukuda (MA in Visual Anthropology, University of Manchester)
村津 蘭(京都大学アジア・アフリカ地域研究研究科博士課程在籍)
Ran Muratsu (PhD candidate in Asian and African Area Studies, Kyoto University)
白井 樹(2018年9月よりマンチェスター大学映像人類学修士課程在籍)
Tatsuki Shirai (MA candidate in Visual Anthropology, University of Manchester, September 2018-)

進行 | MODERATOR
川瀬 慈
Itsushi Kawase



- 会場 | Gallery C
- 入場者数 | 42人
- 主催 | 京都市立芸術大学
Anthro-film Laboratory
- 助成 | 平成29年度文化庁「大学を活用した文化芸術推進事業」
- 印刷物 | A5判フライヤー
「状況のアーキテクチャー」2017年度報告書(55ページ参照)

Organized by Kyoto City University of Arts and the Anthro-film Laboratory with additional funding from the Agency for Cultural Affairs

Printed matter
A5-sized flyer
Situation Design 2017-2018: Report (see p. 55)



2回目はAnthro-film Laboratoryの座談会を開催。変容する時代にどう他者を想像するのか？ そもそも他者とは誰のことなのか？ この座談会では現代人類学の抱える根本的な課題について、経歴も関心も異なる4人の若手研究者たちが自由に意見を交差させた。4人の共通点は人類学と映像制作。デジタル化とインターネットの爆発的な普及により、現代の人類学者は大量の文献をタブレット一つに収めながら旅し、最新の研究動向を遠方いながら瞬時に把握し、フィールドワーク中に論文を執筆することもできる。他者と経験を共有し、生活を身体化することを通して彼らの世界観を「翻訳」することで想像＝創造することを生業としてきた人類学は、時空間と身体の関係性の大きな変化の波にさらされている。デジタル技術の進展により映像制作は人類学者にとってこれまで以上に容易になったが、情報をより直接的・感覚的に伝えられ「他者」との共有を可能にする映像は、人類学にとってどんな意義を持ちうるのか。逆に、人類学は映像に何を貢献できるのか。また、人類学を志すものたちは、これからどのような生き方を描いていくのか。ドキュメンタリー、マジックリアリズム、植民地主義の遺産、日本の周縁性、感覚と芸術——様々な方向へ縦横無尽に飛びながら、デジタルメディア時代の想像力と人類学について会場とともに考えていった。

2018.3.21 Wed 13:00-14:30 / 16:00-17:30* / 18:30-20:00* *アフタートークあり(30分程度)

「im/pulse: 脈動する映像」リサーチプログラム

contact Gonzo映画作品『minima moralia』上映会

Research program for im/pulse: Vincent Moon, contact Gonzo, and the Anthro-film Laboratory
Film screening - contact Gonzo: Minima Moralia

会場 | Gallery C
参加費 | 1,000円
入場者数 | 64人
企画 | 京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA
主催 | 京都市立芸術大学
印刷物 | A5判フライヤー

Planned by Kyoto City University of Arts Art Gallery @KCUA.
Organized by Kyoto City University of Arts

Printed matter
A5-sized flyer

3回目はcontact Gonzoによる映画作品『minima moralia』の上映会を開催。『minima moralia』は、2011年から2017年にかけてのcontact Gonzoの「移動」と「衝突」をキーワードに、あらたに撮影する素材とともにフィクションとノンフィクションを横断しつつ編集を行った長編映像作品である。contact Gonzoの映像哲学を新たに構築した本作品を上映する貴重な機会となった。また一部の上映の後に、contact Gonzoメンバーの塚原悠也、三ヶ尻敬悟、松見拓也によるアフタートークも行った。



アフタートーク登壇者 | SPEAKERS

contact Gonzo

塚原 悠也
Yuya Tsukahara
三ヶ尻 敬悟
Keigo Mikajiri
松見 拓也
Takuya Matsumi



2018.3.22 Thu 16:30-19:30

「im/pulse: 脈動する映像」リサーチプログラム/Anthro-film Laboratory 30

雲南からのイメージの創造 —映像人類学研究を事例に—

Research program for im/pulse: Vincent Moon, contact Gonzo, and the Anthro-film Laboratory/Anthro-film Laboratory 30
Film screenings and discussion by Zhang Hai, Bao Jiang, and Itsushi Kawase

会場 | MEDIA SHOP | gallery (京都市中京区)
入場者数 | 17人
言語 | 発表・議論: 英語・日本語、逐次通訳(英日)あり
主催 | 京都市立芸術大学
Anthro-film Laboratory
印刷物 | A5判フライヤー

Held at Media Shop | Gallery (Nakagyo-ku, Kyoto). Organized by Kyoto City University of Arts and the Anthro-film Laboratory

Printed matter
A5-sized flyer

登壇者 | SPEAKERS

张 海 (雲南大学映像人類学研究所長)
Zhang Hai (Director, Visual Anthropology Laboratory, School of Ethnology and Sociology, Yunnan University)
鮑 江 (中国社会科学院社会学研究所教授)
Bao Jiang (Professor, Institute of Sociology, Chinese Academy of Social Sciences)
川瀬 慈
Itsushi Kawase

上映作品 | FILMS SHOWN
Zhang Hai [Le Hong Songkran: The June New Year Festival of Bulang People] 2017
Zhang Hai, Le Hong Songkran: The June New Year Festival of Bulang People, 2017
Bao Jiang [Happy New Year] 2017
Bao Jiang, Happy New Year, 2017



最終回はAnthro-film Laboratoryの映像上映会と鼎談を開催した。多種多様な民族文化を擁する中華人民共和国雲南省では、1990年代以降、少数民族の出自を持つ人類学者や映画作家が活発に映画制作を行ってきた。そのなかからは、中国の映像人類学研究を牽引する学者や、国際的なドキュメンタリー映画祭で活躍する作家も生まれている。本会では、雲南を代表する映像人類学者であり民族誌映画制作の指導者でもあるZhang Hai(张海)と、人類学的な認識体系に対する、映画的な話法を通じた批判的検討を行うBao Jiang(鮑江)が最新作を上映した。Zhang Haiはプーラン族、Bao Jiangはナシ族を対象に、両者とも、新年を祝う儀礼とその変容の記録を作品のテーマに掲げる。作品の上映後、両者と川瀬慈とで上映作品の制作方法論や雲南を対象とした映像人類学研究、民族誌映画制作の動向について自由に語り合った。

協力展
Exhibition

2017.8.11 Fri - 8.13 Sun

大学間連携事業

同時代学生陶芸展

Intercollegiate Project
Kyoto Ceramics Student Exhibition

会場 | 堀川御池ギャラリー (@KCUAと同じ建物内)
展示室 | Gallery A, B, C
開催日数 | 3日間
入場者数 | 418人
主催 | 京都市立芸術大学
京都精華大学
京都造形芸術大学
嵯峨美術大学
ソウル科学技術大学校
印刷物 | ポストカード

Organized by Kyoto City University of Arts, Kyoto Saga University of Arts, Kyoto Seika University, Kyoto University of Art and Design, and Seoul National University of Science and Technology

Printed matter
Postcard



京都市立芸術大学・京都精華大学・京都造形芸術大学・嵯峨美術大学、そしてソウル科学技術大学校で陶芸を学んだ学生たちによるグループ展が「SILENT @KCUA 2017」(32ページ参照)の会期中に@KCUAと同じ建物内の堀川御池ギャラリーにて開催された。

広報誌
Zine



たねまきアクア03
Tanemaki Akcua 03

判型 B6
寸法 18.2 × 12.3 × 0.2 cm
カラー フルカラー
ページ数 31 pp.
編集 永田 絵里、藤田 瑞穂、西谷 枝里子(リレーリレー)
デザイン 仲村 健太郎
写真 来田 猛、松見 拓也、守屋 友樹 ほか
印刷 株式会社グラフィック
発行者 京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA
発行日 2017年4月30日
収録内容 WORKSHOP @KCUA「身体0ベース運用法」、REPORT @KCUA 拡張された場におけるアートマネジメント人材育成事業「状況のアーキテクチャー」、REPORT @KCUA「マーティン・クリード京都滞在記」、SCHEDULE @KCUA 2017.4-2018.3、VOICE @KCUA vol. 3 榎原亮次「あらゆる役割にプロがいるわけじゃない」、STUDIO VISIT @KCUA vol. 3 坂東幸輔「徳島県神山町」
言語 日本語

Edited by Ellie Nagata, Mizuho Fujita, and Eriko Nishitani (Relay Relay). Photos by Takeru Koroda, Takuya Matsumi, Yuki Moriya, et al. Designed by Kentaro Nakamura. Printed by Graphic Corporation. Published by Kyoto City University of Arts Art Gallery @KCUA on April 30, 2017. Contents: Workshop @KCUA: Shintai 0 Base Unyohō, Report @KCUA vol. 3-1: Arts Management in the Expanded Field "Situation Design" (KCUA Arts Management Program), Report @KCUA vol. 3-2: Martin Creed in Kyoto, Schedule @KCUA: April 2017-March 2018, Voice @KCUA vol. 3: Mitsuhiro Sakakibara "There Aren't Necessarily Professionals in Every Field", Studio Visit @KCUA vol. 3: Kosuke Bando "Kamiyama-cho, Tokushima Prefecture"
Language: Japanese

書籍
Book



京芸transmit program 2017
KCUA Transmit Program 2017

判型 B5変形
寸法 26 × 19.8 × 0.7 cm
カラー フルカラー
ページ数 64 pp.
編集 藤田 瑞穂、永田 絵里
写真 来田 猛、松見 拓也 ほか
装丁・組版 仲村 健太郎
印刷 株式会社ライブアートブックス(大伸社)
発行者 京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA
発行日 2017年7月15日
収録内容 藤田瑞穂「京芸らしさ」と4人の作家たち」、展示風景写真、作品図版、参考図版、アーティストステートメント、作家略歴、会場マップ、服部浩之「transmit/超えて、送る」
言語 日本語、一部英語

Edited by Mizuho Fujita and Ellie Nagata. Photos by Takeru Koroda, Takuya Matsumi, et al. Designed by Kentaro Nakamura. Printed by Live Art Books (Daishinsha). Published by Kyoto City University of Arts Art Gallery @KCUA on July 15, 2017. Contents: Texts by Mizuho Fujita and Hiroyuki Hattori, installation views, artwork photos, reference photos, artist statements, artist biographies, exhibition map
Language: Japanese and English (mostly in Japanese only)

展覧会概要は26-27ページ参照
See exhibition details on pp. 26-27

書籍
Book



東日本大震災復興支援・芸術活動支援チャリティオークション サイレントアクア2017
Charity auction in support of disaster relief and the arts Silent @KCUA 2017

判型 B5変形
寸法 23 × 18.2 × 1 cm
カラー フルカラー
ページ数 100 pp.
編集 京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA
展示風景写真 大島 拓也
デザイン 仲村 健太郎
印刷 株式会社グラフィック
発行者 京都市立芸術大学サイレントアクア実行委員会
発行日 2018年2月28日
収録内容 実施記録、前年度寄付団体活動報告、出展作家一覧、出展作品一覧ほか
言語 日本語

Edited by Kyoto City University of Arts Art Gallery @KCUA. Installation view photos by Takuya Oshima. Designed by Kentaro Nakamura. Printed by Graphic Corporation. Published by the Kyoto City University of Arts Silent @KCUA Committee on February 28, 2018. Contents: Achievements, list of artists, artwork thumbnails, etc.
Language: Japanese

オークション概要は32ページ参照
See auction details on p. 32

広報誌
Zine



たねまきアクア04
Tanemaki Akcua 04

判型 B6
寸法 18.2 × 12.3 × 0.2 cm
カラー フルカラー
ページ数 31 pp.
編集 西谷 枝里子(リレーリレー)、藤田 瑞穂、西尾 咲子、永田 絵里
デザイン 仲村 健太郎
発行者 京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA
発行日 2018年3月20日
収録内容 REPORT @KCUA ヴィンセント・ムーン×contact Gonzo×川瀬慧、REPORT @KCUA「京芸transmit program 2017」の後に、REPORT @KCUA「京芸transmit program 2018」、SCHEDULE @KCUA 2018.4-2019.3、VOICE @KCUA vol. 4 永守 信年「屈折考」、STUDIO VISIT @KCUA vol. 4 西 太志「南区久世のアトリエ」
言語 日本語

Edited by Eriko Nishitani (Relay Relay), Mizuho Fujita, Sakiko Nishio and Ellie Nagata. Designed by Kentaro Nakamura. Published by Kyoto City University of Arts Art Gallery @KCUA on March 20, 2018. Contents: Report @KCUA: Vincent Moon, contact Gonzo, and Itsushi Kawase, Report @KCUA: After KCUA Transmit Program 2017, Report @KCUA: KCUA Transmit Program 2018, Schedule @KCUA: April 2018-March 2019, Voice @KCUA vol. 4: Nobutoshi Nagamori "Kussetsu-ko", Studio Visit @KCUA vol. 4: Taishi Nishi "Studio in Kuze, Minami-ku, Kyoto"
Language: Japanese

書籍
Book



身体0ベース運用法 0 GYM
Shintai 0 Base Unyohō 0 GYM

判型 B5変形
寸法 24.6 × 18.5 × 0.9 cm
カラー フルカラー
ページ数 96 pp.
編集 藤田 瑞穂、永田 絵里
写真 来田 猛、松見 拓也 ほか
デザイン 仲村 健太郎
印刷 株式会社ライブアートブックス(株式会社大伸社)
発行者 京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA
発行日 2018年3月31日
収録内容 0ベース基本トレーニング、展示風景写真、安藤隆一郎「あたりまえの身体の方行」、吉岡美子「身体0ベース運用法」はファンタジーか」、藤田瑞穂「水平線を探る、旅の途中で」、イベントの記録ほか
言語 日本語

Edited by Mizuho Fujita and Ellie Nagata. Photos by Takeru Koroda, Takuya Matsumi, et al. Designed by Kentaro Nakamura. Printed by Live Art Books (Daishinsha). Published by Kyoto City University of Arts Art Gallery @KCUA on March 31, 2018. Contents: Texts by Ryuichiro Ando, Emiko Yoshioka, and Mizuho Fujita, installation views, documentation of related events, etc.
Language: Japanese

展覧会概要は34-35ページ参照
See exhibition details on pp. 34-35

書籍
Book



拡張された場におけるアートマネジメント人材育成事業 状況のアーキテクチャー 2017年度事業報告書
Kyoto City University of Arts Arts Management Program Situation Design 2017-2018: Report

判型 B5
寸法 25.7 × 18.1 × 0.8 cm
カラー フルカラー
ページ数 96 pp.
編集 岸本 光大、熊野 陽平、中田 有美、西尾 咲子、藤田 瑞穂
写真 大島 拓也、松見 拓也、守屋 友樹 ほか
装丁・組版 柳澤 裕樹(サクサクデザイン)
印刷 株式会社ライブアートブックス(株式会社大伸社)
発行者 京都市立芸術大学
発行日 2018年3月31日
収録内容 京都市立芸術大学設計JV×状況のアーキテクチャー「Around the Working Table/作業台の周辺から」、「物質」「生命」「社会」各テーマの活動および成果発表についての報告(開催概要、記録写真、講師による寄稿文など)、藤田瑞穂「点と線から面、そして新たな「状況」へ」ほか
言語 日本語

Edited by Mitsuhiro Kishimoto, Yohei Kumano, Yumi Nakata, Sakiko Nishio, and Mizuho Fujita. Photos by Takuya Oshima, Takuya Matsumi, Yuki Moriya, et al. Designed by Yuki Yanagisawa (Saku Saku Design). Printed by Live Art Books (Daishinsha). Published by Kyoto City University of Arts on March 31, 2018. Contents: Dialogue between the KCUA Design JV (joint venture) and Situation Design, reports and other texts, epilogue by Mizuho Fujita, etc.
Language: Japanese

@KCUAでの事業の概要は本書12-17ページ・28ページ(移動する物質——ニューギニア民族資料)、36-39ページ(still moving 2017: 距離へのパス——far away/so close)、42ページ(うつしから学ぶ)、45ページ(部屋と宇宙と眠らない夜——1990年代前半を中心に)、46ページ(移動する物質——十字路としてのアフガニスタン)、50-51ページ(ヴィンセント・ムーン×contact Gonzo×川瀬慧 トークセッション&ヴィンセント・ムーン映像上映)、51-52ページ(座談会:デジタルメディア時代の人類学——映像で他者を想像する)参照

See pp. 12-17, 28 (Transferring Matter: Artifacts from New Guinea), 36-39 (Still Moving 2017: The Socialism of Distance - Far Away/So Close), 42 (Utsumi kara manabu), 45 (Kyoto City University of Arts Alumni Association Exhibition: The Early Nineties), 46 (Transferring Matter: Afghanistan as Crossroads), 50-51 (Talk session by Vincent Moon, contact Gonzo, and Itsushi Kawase & Film screening by Vincent Moon), and 51-52 (Round-table discussion on anthropology in the age of digital media) in this annual report for information about programs held at @KCUA

書籍
Book



京都市立芸術大学移転整備プロジェクト 状況のアーキテクチャー 2017 プロジェクト7 [Far Away/So Close: 開かれた共同体] still moving 2017: 距離へのパス——far away/so close
In advance of KCUA's relocation/KCUA Situation Design 2017: Project 7 Still Moving 2017: The Socialism of Distance - Far Away/So Close

判型 B5
寸法 25.7 × 18.2 × 0.7 cm
カラー フルカラー
ページ数 80 pp.
編集 藤田 瑞穂
編集補助 熊野 陽平、永田 絵里
写真 松見 拓也 ほか
装丁 松本 久木
印刷 株式会社ライブアートブックス(大伸社)
発行者 京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA
発行日 2018年3月31日
収録内容 藤田瑞穂「距離へのパス——far away/so close」、各プロジェクトの紹介、イベントの記録、大西麻貴「答えの分からない問いを追いかけ続けること」、佐藤知久「創造性への信頼に向けて」ほか
言語 日本語、一部英語

Edited by Mizuho Fujita with assistance from Yohei Kumano and Ellie Nagata. Photos by Takuya Matsumi, et al. Designed by Hisaki Matsumoto. Printed by Live Art Books (Daishinsha). Published by Kyoto City University of Arts Art Gallery @KCUA on March 31, 2018. Contents: Texts by Mizuho Fujita, Maki Onishi, and Tomohisa Sato, texts and photos documenting each sub-project and related events, etc.
Language: Japanese and English (mostly in Japanese only; text by Valentin Gabelier in Japanese and English)

展覧会概要は36-39ページ参照
See exhibition details on pp. 36-39

単位 : mm
Scale: mm

コンパネ 耐荷重40 kg

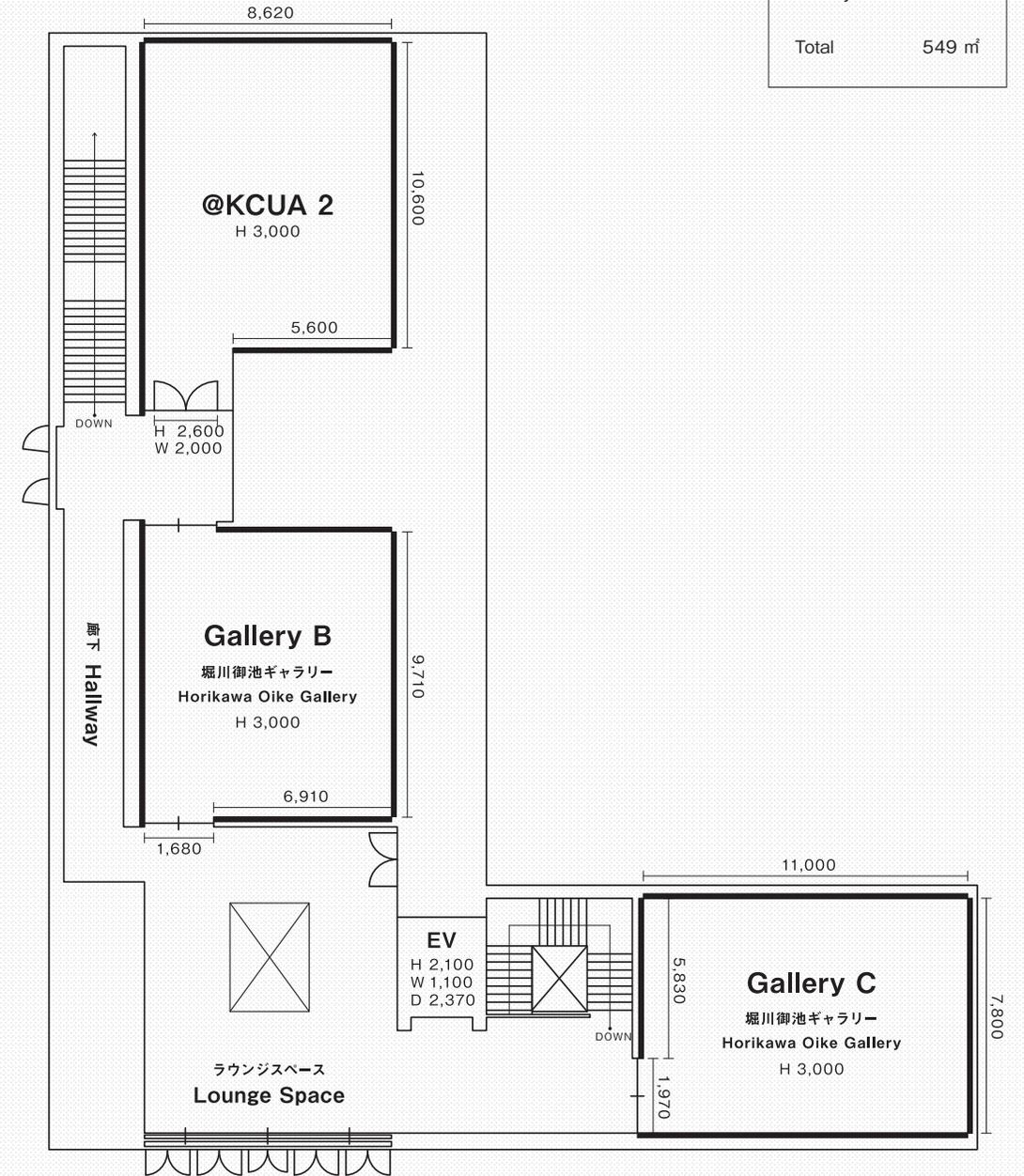
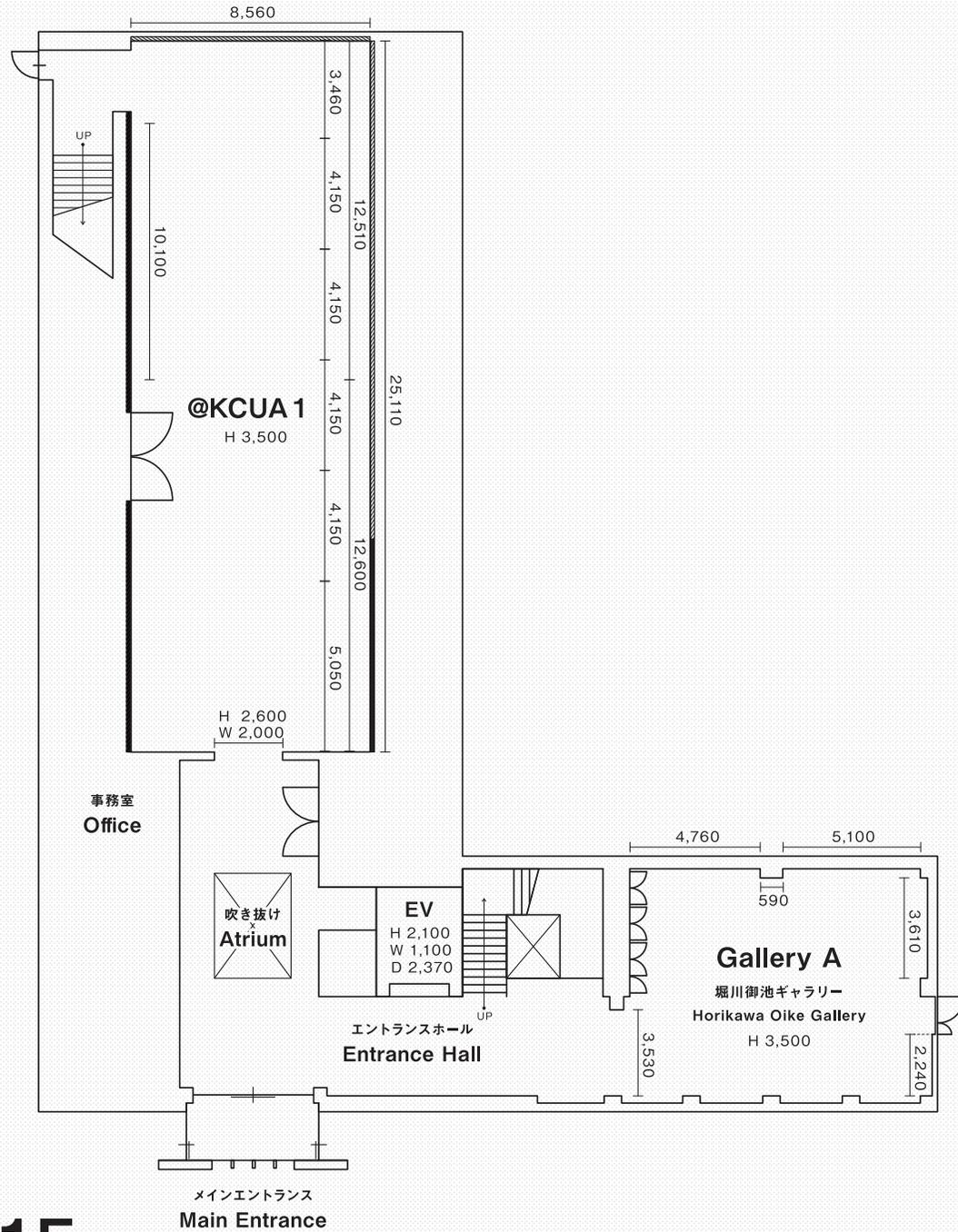
Plywood board / Withstand loads up to 40 kg

壁表面 : 石膏ボード、内部 : MDFボード 耐荷重15 kg

Wall surface: Plaster board / Core: MDF board / Withstand loads up to 15 kg

Floor size

@KCUA 1	215 m ²
@KCUA 2	91 m ²
Gallery A	74 m ²
Gallery B	83 m ²
Gallery C	86 m ²
Total	549 m ²



2017年度 京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA 運営委員会組織

委員長

鶴田 憲次 @KCUA 長、堀川御池ギャラリー 館長

委員

高橋 悟 @KCUA 担当理事
 藤原 隆男 美術学部長
 秋山 陽 美術研究科長
 田島 達也 芸術資料館長
 石橋 義正 美術学部広報委員会委員長
 岡田 加津子 音楽学部教員
 深谷 訓子 美術学部教員(副委員長)
 楠田 雅史 美術学部教員
 武内 恵美子 日本伝統音楽研究センター教員
 石原 友明 芸術資源研究センター所長
 藤田 瑞穂 @KCUA 学芸員
 永田 絵里 @KCUA 学芸員
 荒木 裕一 事務局長
 天沼 憲 総務広報課長
 横道 友香子 連携推進課長
 松尾 芳樹 附属図書館・芸術資料館学芸員

事務局

角田 敏昭 連携推進課附属施設担当課長
 南 寛 連携推進課アドバイザー

2017年

7月4日(火) 運営委員会
 10月12日(木) 企画・申請展部会、運営委員会
 11月28日(火) 運営委員会
 12月26日(火) 運営委員会

2017年度 京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA 運営体制

@KCUA 長 鶴田 憲次(堀川御池ギャラリー館長 兼任)
 学芸員 藤田 瑞穂、永田 絵里
 スタッフ 池田 亜耶子(-2017年12月)、清田 泰寛*、松島 景司(-2017年4月)
 広報 西谷 枝里子*
 経理担当 安西 美恵子
 (* 2018年1月-3月 臨時職員)

京都市立芸術大学主催 拡張された場におけるアートマネジメント人材育成事業(平成29年度 文化庁 大学を活用した文化芸術推進事業)

状況のアーキテクチャー 2017 運営体制

事業統括 高橋 悟
 シニアプログラムコーディネーター 西尾 咲子
 プログラムコーディネーター 岸本 光大、熊野 陽平、中田 有美
 プロジェクトマネジメント 藤田 瑞穂
 事務局 牧野 祥子、安西 美恵子

京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA 2017年度(平成29年度)年次報告書

編集・発行：京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA

〒604-0052 京都市中京区押油小路町238-1

TEL: 075-253-1509

FAX: 075-253-1510

URL: <http://gallery.kcuu.ac.jp>

装丁・組版：柳澤裕樹（サクサクデザイン）

印刷：株式会社グラフィック

発行日：2019年3月31日

© 2019 京都市立芸術大学

Kyoto City University of Arts Art Gallery @KCUA Annual Report 2017-2018

Edited and published by Kyoto City University of Arts Art Gallery @KCUA

238-1 Oshiaburanokoji-cho, Nakagyo-ku, Kyoto 604-0052 JAPAN

Phone: +81-75-253-1509

FAX: +81-75-253-1510

URL: <http://gallery.kcuu.ac.jp>

Designed by Yuki Yanagisawa (Saku Saku Design)

Printed by Graphic Corporation

Published on March 31, 2019

© 2019 Kyoto City University of Arts